第247表　第55号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
12	ロクロ　高台付埦	(16.0)	(5.7)	-	E G H	不良	灰黄褐	15	
13	円筒埴輪	-	(5.7)	-	A D E H	良好	橙	破片	外面タテハケ　内面ナデ
14	形象埴輪	-	(5.9)	-	A B E H	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ
15	鉄製品	直径3.8cm　孔径0.3cm　厚さ0.2cm　重さ14.04 g							紡錘車

第248表　第58号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
16	円筒埴輪	-	(9.2)	-	A B D E H	良好	にぶい赤褐	破片	外面タテハケ　内面ナナメハケ後ナデ

第249表　第64号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
17	須恵器　坏	-	(2.1)	(6.0)	B E H J	良好	灰	30	
18	土師器　甕	(12.0)	(4.6)	-	A B D E	普通	にぶい赤褐	10	

第250表　第72号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
1	須恵器　高台付埦	-	(2.4)	(7.0)	B E H J	良好	灰	15	
2	ロクロ　高台付埦	-	(2.3)	8.4	E H J	良好	灰黄褐	100	内面ほぼ全面に付着物あり
3	土師器　甕	(19.0)	(2.8)	-	E H	普通	にぶい黄褐	10	外面ヘラ記号

第251表　第73号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
4	円筒埴輪	-	(15.2)	-	A B D E H	良好	明赤褐	30	外面タテハケ　内面ナデ・ハケ
5	円筒埴輪	-	(11.8)	-	A B D H J	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ　内面ナデ・ハケ
6	円筒埴輪	-	(6.7)	-	A B D H	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ　内面ハケ・ナデ
7	円筒埴輪	-	(10.8)	-	A B D H	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ・ヘラ描き　内面ナナメハケ
8	円筒埴輪	-	(5.4)	-	A B D H	普通	にぶい橙	破片	外面二次ヨコハケか　内面ナデ
9	円筒埴輪	-	(7.8)	-	A B D E H	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ　内面ナデ・ハケ
10	円筒埴輪	-	(14.5)	-	A B D E H	良好	橙	30	外面タテハケ　内面ナナメハケ　板押圧

第252表　第75号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
11	土師器　鉢	13.2	11.2	-	A B E H	普通	にぶい赤褐	80	

第253表　第84・85号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
12	土師器　甕	(20.0)	(3.4)	-	A B H	普通	にぶい褐	15	

第254表　第92号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
1	土師器　甕	23.2	(23.5)	-	B D E H	普通	褐	60	

第255表　第93号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
2	平瓦	-	-	-	B E H	不良	灰黄褐	-	

第256表　第99号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
3	須恵器　皿	(14.0)	2.5	-	B E H J	良好	黄灰	10	

第257表　第104号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
4	須恵器　高台付埦	(14.0)	(5.1)	-	B E H J	普通	にぶい黄橙	15	

第258表　第106号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
5	須恵器　坏	(14.0)	3.6	(7.4)	BEH	普通	灰黄	15	やや摩耗する

第259表　第109号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
6	灰釉　皿	-	-	-	E	良好	灰白	-	

第260表　第110号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
7	ロクロ　高台付埦	-	(3.8)	8.4	ADEGH	普通	にぶい橙	60	

第261表　第118号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
8	須恵器　高台付埦	-	(3.0)	(6.6)	BEHJ	良好	灰	20	

第262表　第121号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
9	円筒埴輪	-	(5.3)	-	ADEHJ	普通	橙	破片	外面タテハケ　内面ナデ

第263表　第122号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
10	須恵器　皿	(14.0)	1.6	(6.4)	ABEHJ	普通	褐灰	15	

第264表　第123号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
11	須恵器　坏	-	(2.1)	(6.0)	EHJ	良好	灰	20	

第265表　第137号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
12	須恵器　坏	-	(1.1)	(6.6)	BEH	普通	にぶい黄褐	40	
13	須恵器　皿	(16.0)	(2.1)	-	BEH	普通	にぶい黄褐	15	
14	ロクロ　高台付埦	-	(4.1)	(6.6)	ABEHJ	普通	褐	15	

第266表　第141号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
15	須恵器　高台付埦	(14.5)	5.0	7.1	EHJ	良好	灰	70	器形やや歪む
16	ロクロ　坏	(14.0)	(3.5)	-	BEH	不良	灰	20	

第267表　第146号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
17	土師器　坏	(12.0)	(3.2)	-	BDEH	普通	にぶい橙	10	

第268表　第157号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
18	須恵器　甕	-	-	-	EH	良好	灰	-	

第269表　第167号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
19	須恵器　高台付埦	-	(3.2)	6.6	BEHJ	普通	灰白	50	
20	須恵器　羽釜	-	-	-	EHJ	良好	灰	-	

第270表　第171号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器　坏	(13.0)	3.6	(8.6)	ABDEH	普通	橙	30	やや摩耗する
2	石製模造品	長さ(2.3)cm　幅(2.0)cm　厚さ0.25cm　重さ2.0g							剣型

第271表　第174号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
3	須恵器　高台付埦	-	(2.0)	(6.0)	EH	普通	暗灰黄	40	
4	土師器　高坏	(18.0)	(5.6)	-	ABEHJ	普通	橙	60	内面やや摩耗する

第272表　第175号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
5	磨石	長さ8.9cm　幅8.3cm　厚さ2.3cm　重さ279.1g							

第273表　第179号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
6	土師器　高坏	-	(4.5)	-	BEHJ	普通	にぶい赤褐	20	

第274表　第183号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
7	土師器　坏	(14.0)	(3.5)	-	EHJ	普通	褐灰	10	

第275表　第197号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
8	土師器　坩	-	(5.2)	3.8	ABDEHJ	普通	橙	60	
9	円筒埴輪	-	(6.4)	-	ABEGI	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ　内面ナデ

第276表　第198号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
10	青磁　碗	-	-	-	E	良好	オリーブ灰	-	龍泉窯系

第277表　第200号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
11	土師器　甕	(18.0)	(6.1)	-	BDEHJ	普通	にぶい赤褐	15	

第278表　第202号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
12	円筒埴輪	-	(9.8)	(15.2)	ADEH	良好	明赤褐	25	外面タテハケ　内面ナナメタテハケ

第279表　第203号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
13	ロクロ　埦	-	(2.0)	(6.0)	BEH	不良	橙	15	
14	土師器　甕	(20.0)	(5.1)	-	ABEHJ	不良	橙	25	内外面摩耗著しい
15	円筒埴輪	-	(7.0)	-	ADEH	良好	明赤褐	30	外面タテハケ　内面ナナメハケ・ナデ
16	円筒埴輪	-	(8.0)	-	ADEH	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ　内面ナナメヨコハケ
17	円筒埴輪	-	(5.5)	-	ADEH	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ　内面ナナメタテハケ

第280表　第204号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
18	円筒埴輪	-	(5.2)	-	ADEH	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ　内面タテハケ
19	円筒埴輪	-	(6.1)	-	ADEH	普通	橙	破片	外面タテハケ　内面タテハケ
20	形象埴輪	-	(7.3)	-	ADEH	良好	明赤褐	破片	人物埴輪脇部か　内外面タテハケ

第281表　第225号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ　高台付埦	-	(1.4)	(7.0)	AEH	普通	にぶい赤褐	50	
2	土師器　坏	(13.0)	(3.4)	-	AEH	普通	橙	15	

第282表　第228号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備考・出土位置
3	土師器　鉢	(20.0)	(6.6)	-	ABEH	普通	にぶい赤褐	15	

第283表　第229号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
4	土師器　高坏	-	(8.6)	-	ＥＧＨＪ	普通	明赤褐	80	脚部中央に円形の凹みあり
5	土師器　甕	-	(3.3)	(8.0)	ＡＢＥＨ	普通	にぶい橙	30	
6	須恵器　甕	-	-	-	ＥＨ	良好	灰	-	

第284表　第238号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
7	須恵器　高台付埦	-	(2.2)	8.7	ＥＨＪ	良好	灰	60	

第285表　第239号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
8	土師器　坏	(12.0)	(3.4)	-	ＡＨＩ	普通	橙	10	やや摩耗する

第286表　第247号土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
9	土師器　甕	(24.0)	(4.5)	-	ＡＢＤＥＨ	普通	にぶい褐	15	

は広い範囲に散在する。重複するものは少ないが、重複していても同じ方向のものが多い。土壙の軸方向は南北方向を示すものが圧倒的に多く、東西方向は少ない。

規模は、長軸0.7ｍほどのものから８ｍを超えるものまであり、長いものは溝跡と判別し難いものがあった。1.5～2.0ｍと2.5～3.0ｍのものが多くみられる。４ｍ以上のものも16基あり、最大は8.84ｍである。短軸は0.7～1.2ｍが多く、深さは、0.2～0.4ｍのものが多い。

長軸方向は、Ｎ―0°―Ｅ～Ｎ－20°―Ｅの間にあるものが35基と半数以上を占める。東西方向を向いているものは11基である。

遺物は、重複する他の遺構などからの混入と見られるものが殆どである。特に第202・204号土壙などのように規模の大きなものは他の遺構と重複する部分が多く、遺物が混入しやすい。第198号土壙の青磁蓮弁文碗は龍泉窯系と見られ、時期的には土壙に伴っても齟齬はない。小破片であるが、このような遺物が出土することや遺構の規模から、墓壙である可能性が考えられる。

５．不整形

不整形の土壙は20基検出された。この中には、ピットや他の土壙が重複しているものも含まれるが、それらを判別できないものについては不整形として扱った。分布は、遺構の密集する部分に散在する傾向が強いが、規模などは特に特徴的な傾向は出なかった。

図示できた遺物は少なく、第141・238号土壙から須恵器埦が出土している。いずれも10世紀代と思われる。

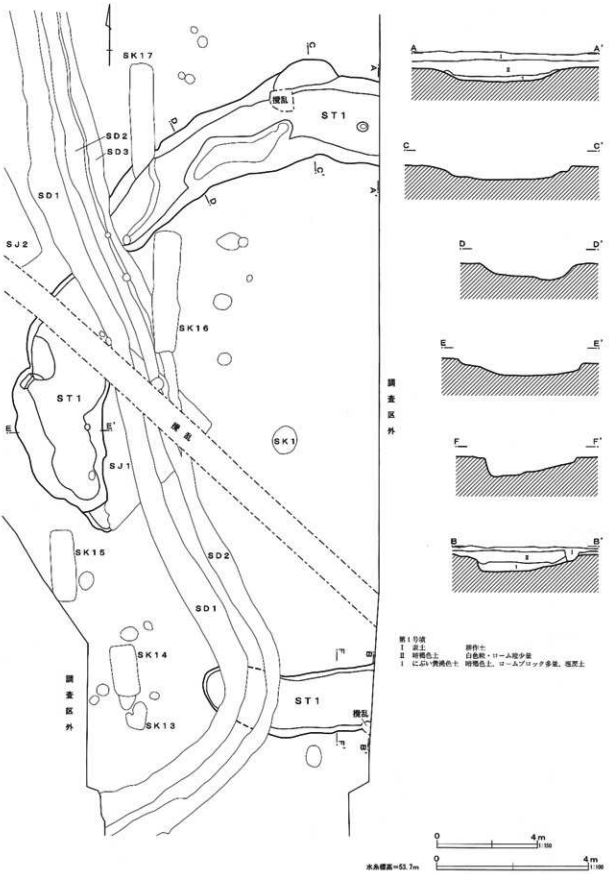
土壙から出土した遺物は小破片が多く、他の遺構との重複が多いことから混入と考えられるものが殆どである。他の遺構との新旧関係や遺構の形態などによってごく大まかな時期は推定できるが、出土した遺物によって推定できるものは少ない。

13. 古墳跡

第１号墳（第385図）

調査区の東側、ＡＡ－57・58、ＢＢ－57、ＣＣ・ＤＤ－57・58グリッドに位置する。第1号住居跡、第１・16・17号土壙、第１～３号溝跡と重複関係にある。新旧関係は第１号住居跡より新しく、第16・17号土壙、第１～３号溝跡より古い。

墳丘径南北20.5ｍ、周溝径24ｍの円墳である。東側半分は調査区外にかかるため、東西方向の規模は不明である。墳丘は既に削平されており、主体部は検出されなかった。



第385図　第1号古墳跡

墳丘部の形態は、やや出入りがあり南側は直線的である。南西側には周溝を掘り残して陸橋部を形成している。陸橋部は幅6.3ｍで、開口方向はほぼＳ－45°－Ｗを示す。周溝は幅2.5～3.5ｍで、北西部分が括れているように思われるが、溝跡が重複しており詳らかでない。確認面からの深さは1.5ｍ前後である。底面は北側で土壙状に深く掘り込まれた部分が見られるが南側は平坦である。立ち上がりは墳丘側がやや急角度である。覆土は自然堆積と見られ、上層は基本土層のⅡ層が堆積していた。

遺物は、陸橋部北側で第１号住居跡と重複しているため古墳時代前期の遺物が流れ込んでいた。また、覆土上位からは平安時代と思われる須恵器坏片が出土したが、古墳に伴うと考えられる遺物は出土していない。平安時代頃の須恵器が覆土上位から出土していることや、その時期の住居跡が重複していないことは、その頃まで周溝が埋まりきらず、墳丘も残っていた可能性があることを示している。

14. 茶毘跡

第１号茶毘跡（ＳＫ164）（第386図）

調査区の北側、Ｖ－55グリッドに位置する。北側の浅い谷状の斜面に位置し、すぐ南側に第36号溝跡があり、南西方向８ｍに第２号茶毘跡があるが全体に遺構は希薄である。重複する遺構はない。

平面形態は隅丸長方形で東辺のほぼ中央に張り出しがある。覆土は暗褐色土を主体に焼土と炭化物を多量に含んでいた。本体部分は長さ2.0ｍ、幅1.0ｍで、深さは0.14ｍである。主軸方向はＮ－６°－Ｅを示す。底面はほぼ平坦で、一部が被熱によって僅かに赤化していた。北側の壁は、地形が傾斜しているため確認段階で消失していた。張り出し部は基部の幅が0.42ｍで長さは0.52ｍである。底面の傾斜は約15°である。

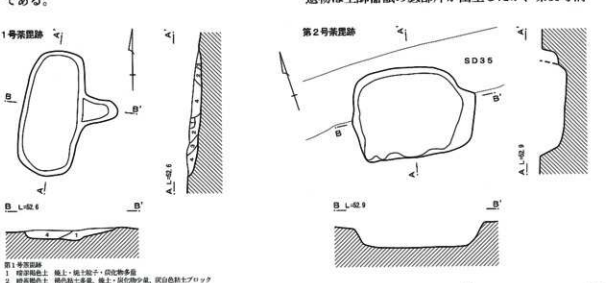
遺物は出土しなかった。

第2号茶毘跡（ＳＸ10）（第386図）

調査区の北側、Ｖ－55グリッドに位置する。第１号茶毘跡と近く、北側に緩く傾斜する斜面の肩部に位置する。第35号溝跡と重複し、本遺構が新しいと思われた。

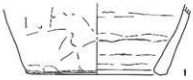
平面形態は幅広の長方形である。規模は長さ2.0ｍ、幅1.40ｍ、深さ0.35ｍで、主軸方向はＮ－75°－Ｗを示す。土層断面図は掲載していないが、覆土は暗褐色土で炭化物、焼土粒を多量に含み、炭化物は層状に面的な広がりを示していた。また、骨粉も相当量含まれていたことから茶毘跡と判断した。

遺物は土師器甑の底部片が出土したが、第35号溝



第１号茶毘跡
1　暗褐色土　焼土・焼土粒子・炭化物多量
2　暗褐色土　褐色粒子多量、焼土・炭化物少量、灰白色粘土ブロック
3　黒褐色土　炭化物・焼土粒子多量、暗褐色粘土黒色土主体
4　暗褐色土　暗褐色粘土主体、焼土多量

第386図　茶毘跡



第387図　第２号茶毘跡出土遺物

第287表　第２号茶毘跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
1	土師器　甑	-	(7.5)	(15.0)	ＢＤＨＪ	普通	橙	5	

跡からの混入の可能性もある。

15. 土壙墓

第１号土壙墓（ＳＫ47）（第388図）

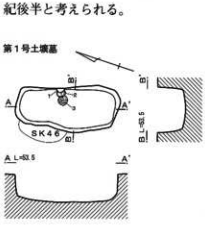
調査区の東側、Ｚ－56グリッドに位置する。調査時に第47号土壙としたものである。第46号土壙と重複する。平面形態は長方形である。規模は長さ1.65ｍ、幅0.70ｍ、深さ0.40ｍである。主軸方向はＮ－18°－Ｗを示す。底面は中央が僅かに窪み、断面は箱型を呈する。

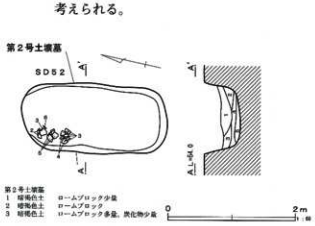
遺物は東壁のほぼ中央に、壁に接して完形の高台付埦が３個体正位で重なるようにして出土した。出土状況から、流れ込みなどではなく壁際に置かれたと推定されるため、土壙墓と判断した。時期は10世紀後半と考えられる。

第２号土壙墓（ＳＫ248）（第388図）

調査区の南側、ＪＪ－44グリッドに位置する。調査時には第248号土壙とした。第52号溝跡と重複し、本遺構が新しい。平面形態は長方形である。規模は長さ2.35ｍ遺存していた。幅1.08ｍ、深さ0.58ｍである。主軸方向はＮ－12°－Ｗを示す。底面はほぼ平坦で、断面は箱型を呈する。

遺物は、西辺北側の壁寄りに坏や高台付埦、刀子が検出された。土器は第１号土壙墓と同じく完形率が高く、出土状況も類似している。また、刀子など遺物の内容から土壙墓と判断した。時期は10世紀と考えられる。

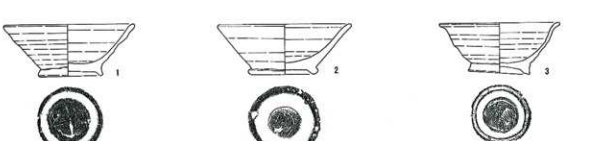




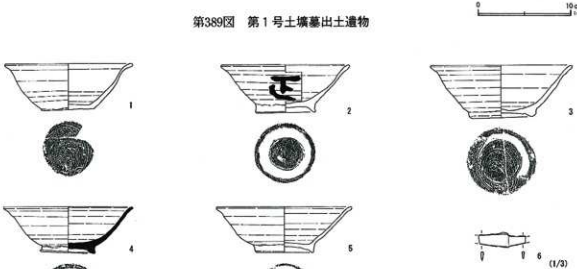
第388図　土壙墓

第288表　第１号土壙墓出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
1	ロクロ　高台付埦	14.0	5.5	6.8	ＡＥＨ	不良	橙	100	やや歪みあり
2	ロクロ　高台付埦	14.2	5.3	7.4	ＥＨＪ	普通	灰黄	100	やや歪みあり
3	ロクロ　高台付埦	12.9	5.5	6.5	ＡＢＥＨ	良好	にぶい黄	100	やや歪みあり



第389図　第１号土壙墓出土遺物



第390図　第２号土壙墓出土遺物

第289表　第２号土壙墓出土遺物観察表

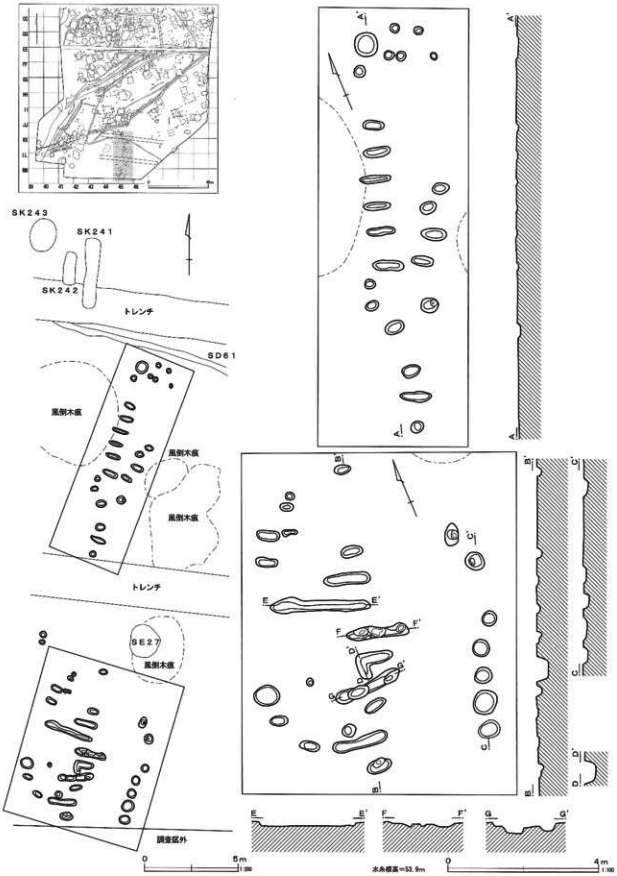
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
1	須恵器　坏	13.7	5.0	5.5	ＡＥＨＪ	普通	浅黄	60	
2	須恵器　高台付埦	13.7	5.1	6.3	ＡＥＨＪ	普通	浅黄橙	95	体部外面に墨書「正」
3	須恵器　高台付埦	15.0	5.6	(7.0)	ＢＥＨＪ	普通	灰黄	95	
4	須恵器　高台付埦	13.8	4.9	5.9	ＥＨＪ	良好	灰	95	やや歪みあり
5	須恵器　高台付埦	14.4	4.8	6.0	ＡＥＨＪ	普通	にぶい黄橙	95	
6	鉄製品	残存長3.7cm　幅1.0cm　厚さ0.2cm　重さ2.3ｇ							刀子

16. 畠跡

畠跡（第391図）

調査区の南側で畠跡と考えられる遺構が検出された。畝状の痕跡で、ＫＫ～ＭＭ－45グリッドを中心とする位置に広がる。表土を除去した段階ではＫＫ～ＭＭ－44～46グリッドやＭＭ－41・42グリッド周辺にも見られたが、浅く部分的には痕跡程度の残存状態であった。遺構確認の段階でほとんどが消失してしまい、最終的には図示した範囲でしか捉えられなかった。畝状の痕跡はかなりの部分が消失して短くなっているが、幅は20～40cmである。覆土は暗褐色土でしまりは弱いものであった。

分布は第61号溝跡の南側に限られていた。第61号溝跡の南側には、第29号井戸跡以外に遺構は存在しないことから、この区域が畑地として利用されてい


SK243
SK241
SK242
トレンチ
SD61
風倒木痕
風倒木痕
風倒木痕
トレンチ
SE27
風倒木痕
調査区外
水糸標高=53.9m

第391図　畠跡

たと考えられる。

遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、住居跡などの存在しない空間に分布することから北側集落が営まれていた時期のものと考えておきたい。

17. 道路跡

道路跡は3条検出された。道路跡の形態は2種類認められる。ひとつは両側に側溝を持つもので、第1・3号道路跡が該当する。他方は硬化面をもつもので第2号道路跡が該当する。前者は地形図（第6図）にその痕跡を読み取ることができ、昭和30年代までは使われていたことがわかるが、遺物から近世段階までは確実に遡れる遺構と判断される。後者は部分的な検出に留まったため全容を把握することはできなかったが、遺構の重複関係から古代まで遡る可能性がある。

第1号道路跡（第392図）

ＥＥ－51グリッドからＨＨ－41グリッドにかけて検出された。西側は調査区外で南西に延びる道路に続き、東側は調査区中央の現水路に沿って延び、大寄八幡大神社の南側を真っ直ぐに東に延びるか、或いは大寄八幡大神社の西側で曲がり北東方向に延びる道に続く。第268・269・271・272号住居跡、第27・35号掘立柱建物跡、第15・42・47・49・50・59号溝跡、第271・272・237・250・261号土壙、第63・65号粘土採掘坑と重複する。調査区内の西端で第49・59号溝跡と交差しているがこの部分は橋が掛かっていたようである。他の遺構については、本道路跡が新しい。

検出された長さは、道路の中央で75ｍである。幅は1.1～2.0ｍで、側溝を含めた幅は2.9～4.1ｍである。方向はＮ－62°－Ｅを指す。道路面は周囲より10～30㎝低く、ＦＦ－46グリッド付近では5㎝前後の礫が多量認められた。

側溝は両側ともほぼ同じ規模で、北側は長さ73ｍ検出された。南側は調査区中央の水路から東に延びる部分が残っており、長さは99ｍ検出された。幅は20～70㎝と開きがあるが、安定した部分では30～50㎝である。路面からの深さは5～20㎝である。

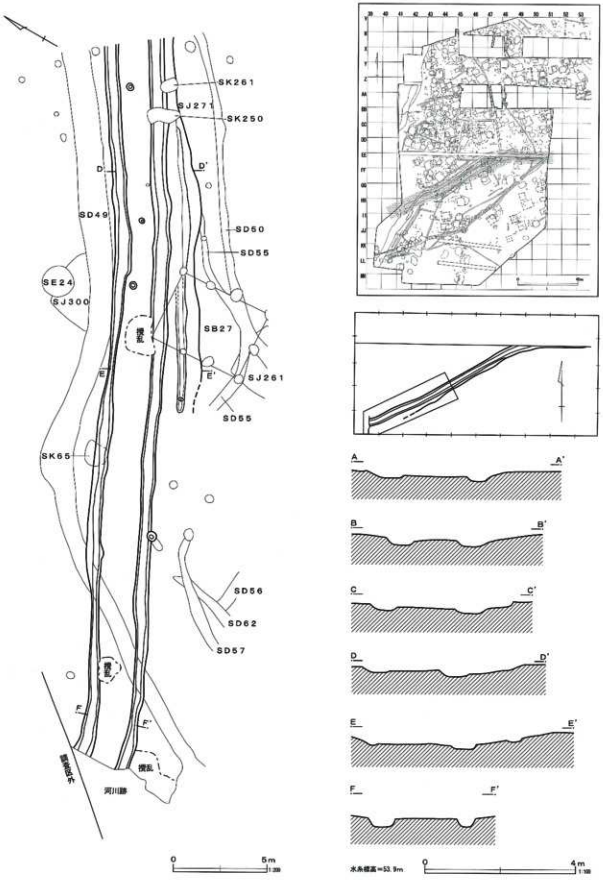
遺物は側溝などから小破片が出土した。土師器片も含まれるがこれらは混入と思われ、遺構の時期は図示した遺物により17世紀以降と考えられる。1・2は陶器碗である。1は唐津産で刷け塗りされる。2は瀬戸産である。3は内耳土器である。体部の破片であるが、かろうじて底部が残っている。器高は5.6㎝で、内耳上端は口縁部上端に接合し、下端は底部には達せず体部下端に接合している。4は在地産の鉢である。5は常滑産甕の胴部破片である。6は煙管の火皿部分である。断面は箱型に近いが、僅かに残る雁首部分は湾曲して延びるものと思われる。

第2号道路跡（第396図）

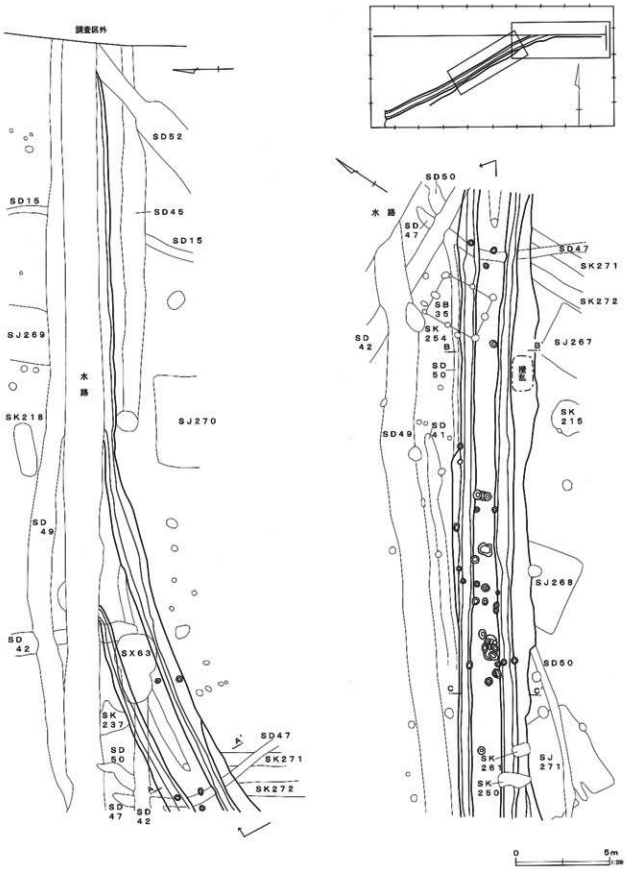
検出された範囲は狭いが、硬化面があり一部に波板状の痕跡も認められることから道路状遺構と判断した。検出されたのは調査区南側のＩＩ－45グリッドである。第52号溝跡、粘土採掘坑第1群と重複し最も新しい。

調査の過程で下げてしまったために、平面図では硬化面の範囲が2ヵ所に分かれているが、遺構確認時には断面図にあるように繋がっていた。1層は暗褐色土でローム粒が少なくしまりはあまり強くない。下層の3層下面はロームが多く含まれ、版築したように硬化していた。北側の硬化面には長さ1～2ｍで、幅40㎝ほどの波板状の掘り込みが検出された。この掘り込みは南西から北東方向に連続していることから、道路状遺構はその方向に延びていたものと考えられる。断面図で見る限りでは底面に10㎝ほどの段がありこの範囲がおおよそ平面図の硬化部分となる。また、1層と3層の堆積範囲には違いが見られることから時間的な差があることも考えられる。

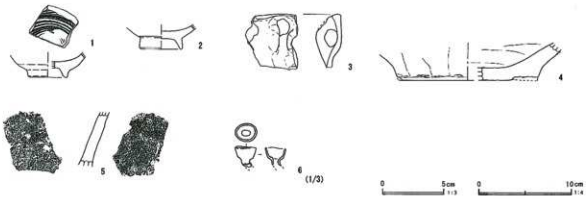
図示できた遺物は2点である。1は土師器坏である。北武蔵型の坏で時期は7世紀後半である。2は



第392図　第１号道路跡（1）



第393図　第１号道路跡（2）



第394図　第１号道路跡出土遺物

第290表　第１号道路跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
1	碗	-	(2.7)	(4.0)	E	良好	灰褐	10	ＥＥ46　唐津産
2	碗	-	(2.6)	4.4	E	良好	明黄褐	60	ＥＥ47
3	内耳鍋	-	-	-	ＡＢＥＨ	普通	褐灰	-	ＥＥ42
4	鉢	-	(4.0)	(15.0)	ＢＥＨＪ	普通	灰	20	ＦＦ45
5	甕	-	-	-	ＥＨＪ	良好	にぶい赤褐	-	ＥＥ47　常滑産
6	銅製品	現存長1.6cm　厚さ0.1cm　重さ3.0ｇ							ＧＧ44　煙管

土師器台付甕の台部分である。時期は１の坏よりは降るものと考えられる。遺物の時期は第52号溝跡と重なるものであることから、遺構の時期は、第52号溝跡が埋まってあまり時間差をおかずに造られたものと考えておきたい。

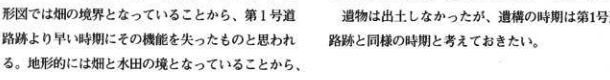
第３号道路跡（第396図）

調査区の北側、Ｖ－48・49、Ｗ－50グリッドに位置する。第１号溝跡と同じく両側に側溝を持つ。地形図では畑の境界となっていることから、第１号道路跡より早い時期にその機能を失ったものと思われる。地形的には畑と水田の境となっていることから、微高地の縁辺部を通っていたことがわかる。

検出された長さは17.10ｍで幅は0.5～0.7ｍである。側溝を含めた幅は1.8～2.0ｍであるが、北側は地形が低くなり確認面が下がっているためもう少し広かったと考えられる。主軸方向はＮ－51°－Ｗを示す。

道路面は南側の確認面より15～20cm下がっている。側溝は南側の方がやや規模が大きく、幅は0.8～1.0ｍ、深さは最大で20cmである。北側は上面が失われているが、幅は0.5～0.6ｍ、深さは３～５cmである。

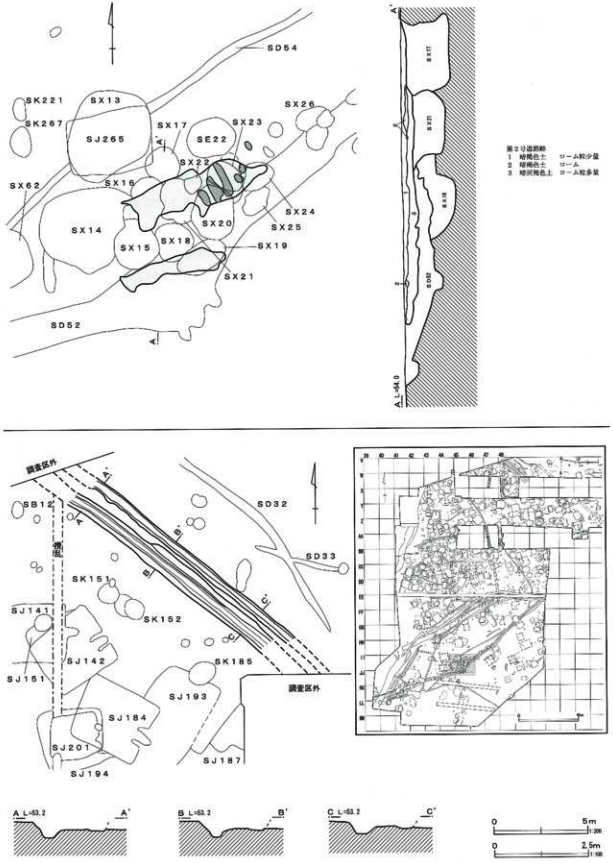
遺物は出土しなかったが、遺構の時期は第1号道路跡と同様の時期と考えておきたい。



第395図　第２号道路跡出土遺物

第291表　第２号道路跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考・出土位置
1	土師器　坏	(14.0)	(3.0)	-	ＢＤＨ	普通	橙	15	ＩＩ45
2	土師器　台付甕	-	(3.2)	(8.4)	ＥＧＨ	普通	にぶい赤褐	60	ＩＩ45



第396図　第2・3号道路跡

18. グリッド出土遺物

グリッド出土遺物（第397～400図）

1は三彩陶器である。小破片であるが合子かと思われる。傷みが激しく釉はかなり剥離しているが、褐色及び緑色釉が明瞭に残る。胎土は淡褐色で軟質である。

2・3は緑釉陶器である。2は底部内面に花文が施される。釉は高台端部を含む全面に施される。胎土は黄白色で軟質である。3は埦と思われる。口唇部は薄く作られる。胎土は淡橙色で中心部は黒味が残る。2よりは硬質である。4・5・8・9は灰釉陶器である。4は埦と思われる破片である。釉はやや厚く、胎土はやや軟質である。5は埦の体部破片である。釉は刷毛塗りされ、胎土は薄く硬質である。8は長頸壺の底部である。下方の破片のため釉は及ばず、底部内面に降灰している。底部外面中央には糸切痕が見られる。胎土は僅かに褐色を帯び硬質である。9は釉がかなり剥離している。内面底部は重ね焼きの痕跡が残る。高台は付高台である。胎土は空隙が多い。

6・7は青磁蓮弁文碗である。6は口縁部がやや外側に開く。釉は深い緑色で貫入が見られる。胎土は暗灰色で硬質である。7は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。釉は僅かに緑を帯びる。胎土は暗灰色で硬質である。龍泉窯系。13世紀代と思われる。

10・11は須恵器蓋である。10は摘み部の残存である。比較的扁平な作りで胎土に片岩片を多く含む。末野産。11は端部が丸く作られ、返りは短い。外面は天井部が回転篦削りされる。胎土は白色粒子を多量に含む。色調は黒灰色である。

12～15・17～19は須恵器坏である。12は轆轤痕が顕著で、口縁部が僅かに外反する。色調は灰色を呈し、胎土は小礫を含む。焼成は良好である。末野産。9世紀。13は体部中位がやや厚くなるが内湾して立ち上がる色調は灰色を呈し、焼成は良好である。9世紀。14は体部から口縁部の破片である。色調は黒褐色、胎土は暗褐色を呈し、白色粒を多く含む。8世紀前半。15は底部破片である。周辺は篦ケズリされる。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は白色針状物質を多く含む。鳩山産。8世紀前半。17は底部周辺が篦ケズリされ、体部は外傾して立ち上がる。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は白色針状物質を含む。鳩山産。8世紀中葉。18は底部回転糸切される。色調は赤みを帯びるが、焼成は良好である。胎土は礫を含む。末野産。9世紀。19は底部回転糸切される。色調は灰白色で焼成はやや軟質である。胎土は礫を含む。9世紀と思われる。

16・20～34は須恵器高台付埦である。16は高台が欠けており、実際には図示したものより厚みがある。高台径は広く、低めに作られる。焼成は良好である。20は高台の作りは雑で、体部は僅かに内湾するものの直線的な印象が強い。口縁部はわずかに肥厚し外反する。色調は灰色を呈するが、焼成は軟質であまりよくない。末野産。21・22は、高台は整っている。口唇部は厚く、強く外反する。色調は灰褐色で、焼成は良くない。末野産。23は赤褐色を呈するが、焼成は比較的良い。24・25は薄く作られ還元炎焼成されるが、一部褐色を呈する。焼成は良好で、硬質である。末野産。26は、高台の作りが雑で軽い。色調は白色に近く、焼成は軟質である。27・28は高台端部が外側に強く開く。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。末野産。

29はにぶい黄灰色で焼成はやや不良である。末野産。30は高台径が大きく、外面は黄褐色で内面は白色に近い。焼成は良い。31・39は高台が薄く丁寧に作られる。31は高台がやや高く丁寧に作られ、くすんだ灰色を呈するが、一部に黒味を帯び、焼成はあまり良くない。39は暗い褐色。32は、高台は丁寧に作られる。色調は褐色を呈するが、焼成は良好で硬質である。鳩山産と思われる。33は橙褐色を呈し、焼成は硬質である。34は青味がかった灰色を呈し、胎土には空隙が多い。35は胎土、焼成など23に類似する。

36・37は須恵器皿である。36は還元炎焼成で、色調は暗灰色を呈する。胎土は赤色粒を多量に含み、焼成は良好である。37は褐色を呈し、胎土には片岩を含む。焼成は良いほうである。末野産と思われる。

38は脚付盤と思われる。器厚は厚く、脚の接合部は轆轤回転により沈線状の刻みを入れ接合しやすくしている。色調は灰色で、胎土は片岩を含み、中心部は橙褐色を呈する。末野産と思われる。40・41はロクロ土師器である。酸化炎焼成で淡橙褐色を呈する。41は高台が特徴的で、底部中央に近い所から轆轤回転による整形を行っており、中心部が小さく突出して糸切痕が残る。

42～52は土師器坏である。42は口縁部中位に浅い沈線状の段を持つ有段坏である。43～46は北武蔵型坏である。47～49・51は平底の底部に口縁部は外傾して立ち上がる。51は底部内面に篦状工具による格子状の刻みが見られる。

53は鉢である。底部外面には木葉痕が残る。体部には輪積み痕が３～４段見られる。

54～56は土師器高坏である。54は坏部である。脚部との接合は円錐形のソケット状である。55・56は脚部である。段を持ち、55の突帯は小さく鋭い。いずれも外面に放射状の暗文が施される。

57は須恵器壺の破片である。色調は暗褐色に近く、焼成は良い。

58は須恵器甕か小型の壺と思われる。外面に沈線が２条見られる。小破片から復原実測しているため、径はもう少し大きいかもしれない。外面は灰色で内面は淡灰褐色を呈する。焼成は良い。鳩山産か。

59・60は土師器甕の口縁部、61・62は壺、63～65は甕底部である。

66は甑である。体部外面は縦方向の篦ケズリ、内面は横方向にナデられる。鍔には２個１組の焼成前穿孔が見られる。胎土は砂粒を含み、焼成は良い。

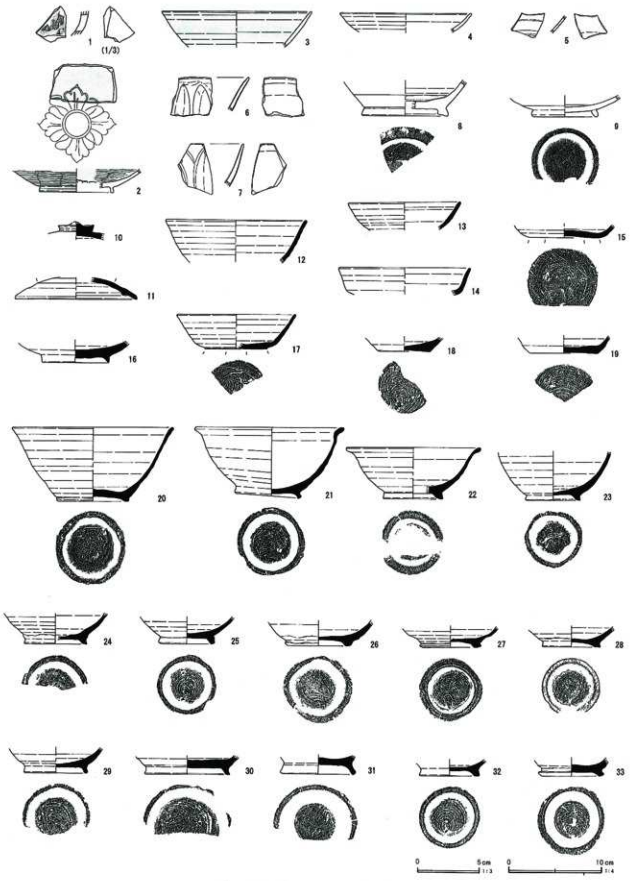
67は須恵器甕の底部と思われる。色調は灰色から暗灰色を呈し、胎土には小礫を多く含む。焼成は良好である。末野産と思われる。

68～77は須恵器甕の破片である。68～70・72は口縁部である。68は櫛状工具による波状文が２段施される。上段の波状文は２本１単位のものを２単位施文しているが、雑で一部は重なっている。下段は４本１単位のものを浅く施文し、後から一番上に棒状工具で描き足している。色調は灰色を呈し、胎土は細かい砂粒を含む。焼成は良好である。69は口縁端部外面が小さく引き出され、口縁部下にも突帯が見られる。突帯は粘土を貼り付けて、半裁した竹のようなもので調整している。色調は灰色を呈し、胎土には白色の細粒と小礫を多く含む。焼成は良い。70は大型の甕で口縁部の断面は三角形を呈する。内面には斑状に降灰が見られる。色調は黒灰色を呈し、胎土は細かく密である。焼成は良好である。72は口唇部を欠くが、外面に波状文が３段見られる。工具は２本１単位で雑な施文である。色調は黒灰色を呈し、胎土は礫を多量含む。焼成は良好である。71は頸部である。外面は丁寧にナデられるが、爪跡が1列見られる。頸部或いは口縁部調整の際についたと思われる。内面も丁寧にナデられるが、一部に小口状の工具痕が残る。色調は黒灰色で、胎土は白色細粒を多く含む。73～77は胴部破片である。73・74・76・77は外面に格子状の叩きが施される。77は73・74より細かい格子である。74は叩きの後軽くナデている。内面はいずれも同心円状の当て具痕が残るが、74は一部をナデ消している。色調は73が灰色、74は明灰色、76・77はくすんだ灰色を呈する。胎土は73が砂粒を少量含み、74は細かく比較的密である。76・77は礫を多く含む。75は壺の可能性もある。外面は正格子の叩きが施され、一部横方向に篦ケズリされる。内面は横方向のナデ調整である。色調は黄灰色で、胎土は礫を少量含み、焼成は良くない。

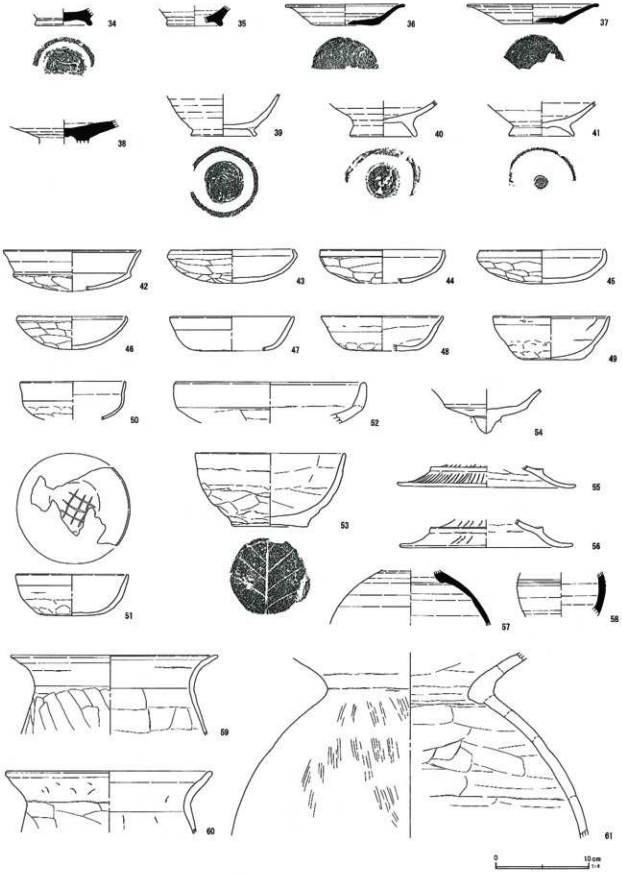
78～81は埴輪である。78は突帯から上に横方向のハケ目が施される。

82は土製紡錘車である。約1/4の残存である。状態が悪く調整などは不明である。

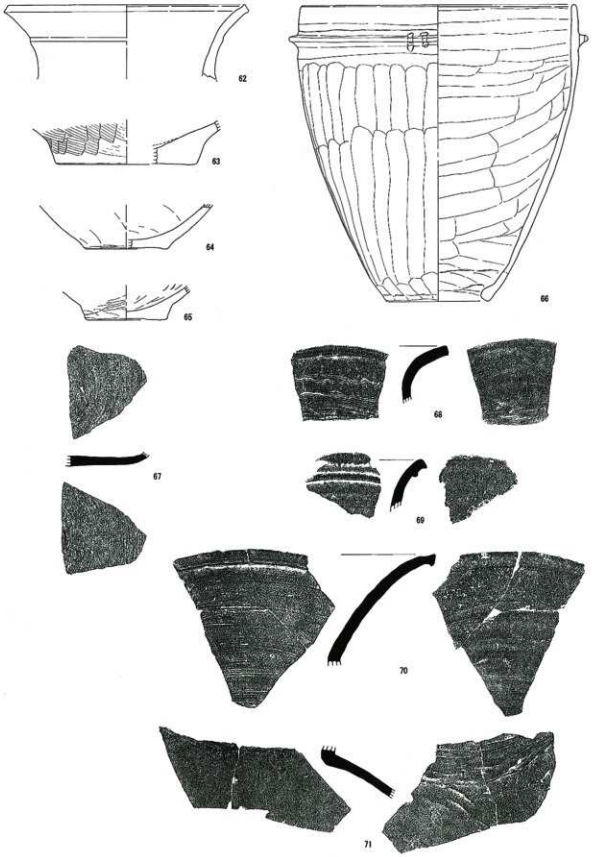
83・84は土錘である。83は両端の一部を僅かに欠



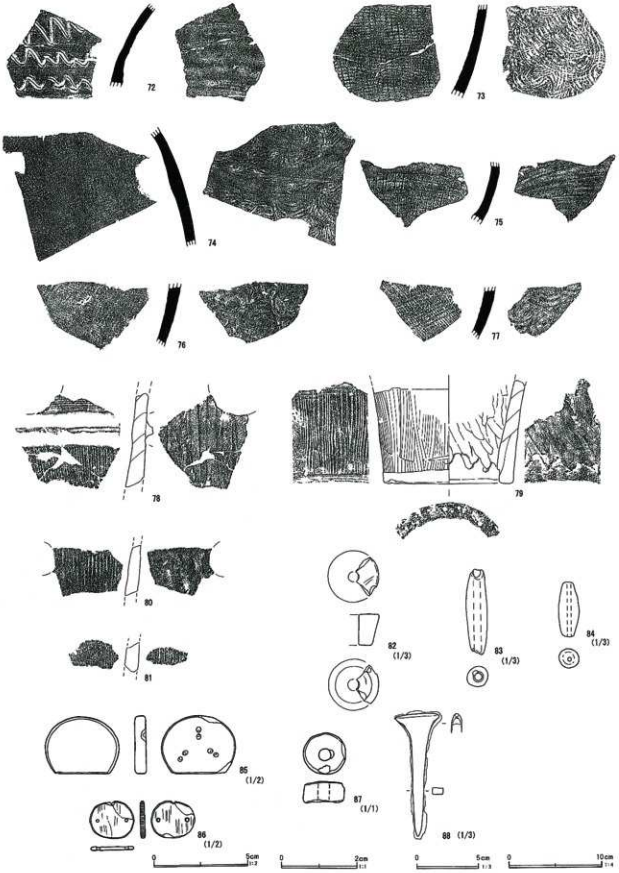
第397図　グリッド出土遺物（1）



第398図　グリッド出土遺物（2）



第399図　グリッド出土遺物（3）



第400図　グリッド出土遺物（4）

第292表　グリッド出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率(%)	備　考　・　出　土　位　置
1	三彩陶器	-	-	-	E	良好	灰白	-	ＣＣ46　内外面施釉
2	緑釉　皿	-	(2.4)	(8.0)	E	良好	オリーブ灰	20	全面施釉
3	緑釉　埦	(16.0)	(3.8)	-	E	良好	灰オリーブ	10	V53
4	灰釉　埦	(14.0)	(2.0)	-	E	良好	灰オリーブ	10	V
5	灰釉　埦	-	-	-	E	良好	灰白	-	ＡＡ48
6	青磁　碗	-	-	-	E	良好	灰オリーブ	-	ＤＤ44　外面に蓮弁　龍泉窯系
7	青磁　碗	-	-	-	E	良好	オリーブ灰	-	ＢＢ44　外面に蓮弁　龍泉窯系
8	灰釉　壺	-	(3.8)	(9.2)	E	良好	にぶい赤褐	15	V50
9	灰釉　埦	-	(2.3)	6.8	E	良好	灰白	80	ＣＣ58
10	須恵器　蓋	-	(1.9)	-	ＥＪ	良好	灰	90	ＩＩ45　つまみ径3.8cm
11	須恵器　蓋	(13.0)	(2.3)	-	ＢＥＪ	良好	黒灰	15	ＢＢ44
12	須恵器　坏	(15.0)	(4.5)	-	ＢＪ	良好	灰	10	ＨＨ47
13	須恵器　坏	(12.0)	(2.9)	-	ＢＥ	良好	灰	20	Ｙ48
14	須恵器　坏	(14.0)	(2.8)	-	ＥＨ	良好	灰	10	ＩＩ45
15	須恵器　坏	-	1.4	(7.4)	ＥＦＪ	普通	褐灰	70	V50
16	須恵器　高台付埦	-	(2.4)	(7.0)	ＡＤＥＧＨ	良好	にぶい橙	80	酸化焔焼成
17	須恵器　坏	(12.0)	3.7	(6.6)	ＥＦ	良好	灰	30	V50
18	須恵器　坏	-	(1.5)	5.6	ＢＥＪ	良好	灰黄褐	60	V52
19	須恵器　坏	-	(1.9)	(7.2)	ＢＥＧ	普通	灰白	20	W50
20	須恵器　高台付埦	(17.0)	7.8	6.6	ＢＥＪ	普通	灰	20	V58
21	須恵器　高台付埦	16.2	7.4	7.0	ＡＥＩＪ	普通	灰黄褐	80	ＣＣ58
22	須恵器　高台付埦	14.4	5.4	6.8	ＡＥ	普通	灰黄褐	50	ＦＦ50
23	須恵器　高台付埦	-	(5.1)	5.8	ＡＢＥＨＪ	普通	にぶい赤褐	80	U58　酸化焔焼成
24	須恵器　高台付埦	-	(3.3)	(6.7)	ＢＥＪ	良好	黄灰	30	R58
25	須恵器　高台付埦	-	(2.9)	6.0	ＡＢＥＨ	普通	にぶい黄橙	90	U58
26	須恵器　高台付埦	-	(2.6)	7.0	ＢＤＥＨ	普通	灰	80	
27	須恵器　高台付埦	-	(2.3)	6.5	ＥＪ	良好	黄灰	80	V58
28	須恵器　高台付埦	-	(2.2)	6.2	ＢＥＨＪ	良好	灰	100	ＡＡ48
29	須恵器　高台付埦	-	(2.7)	6.8	ＡＥＩＪ	普通	にぶい黄橙	60	V58
30	須恵器　高台付埦	-	(2.0)	9.0	ＢＨ	普通	浅黄	60	V50　摩耗著しい
31	須恵器　高台付埦	-	(2.0)	8.0	ＢＥＨＪ	良好	灰	80	V50　やや摩耗する
32	須恵器　高台付埦	-	(1.7)	6.4	ＡＥ	良好	にぶい褐	100	U49　酸化焔焼成
33	須恵器　高台付埦	-	(2.0)	6.9	ＡＢＤＥＨＪ	普通	明赤褐	100	ＣＣ43
34	須恵器　高台付埦	-	(1.7)	6.0	ＢＨ	普通	灰	50	W48
35	須恵器　高台付坏	-	(2.1)	(6.0)	ＡＥＨ	普通	にぶい赤褐	15	W50
36	須恵器　皿	(12.6)	2.2	(6.8)	ＥＨＪ	良好	灰	40	W50　底部中央付近焼成後穿孔か？
37	須恵器　皿	(14.0)	2.1	(6.4)	ＡＢＥＨＪ	普通	にぶい橙	25	V57
38	須恵器　高台付盤	-	(2.3)	-	ＢＥＨＪ	良好	黄灰	70	W57
39	ロクロ　高台付埦	-	(4.3)	7.0	ＡＢＥ	普通	にぶい黄褐	80	ＣＣ58
40	ロクロ　高台付埦	-	(3.7)	(7.0)	ＧＨ	不良	にぶい黄橙	60	Q58　摩耗著しい
41	ロクロ　高台付埦	-	(7.6)	(7.0)	ＢＤＥＧＨ	普通	にぶい橙	40	Q58　摩耗著しい
42	土師器　坏	(14.6)	(4.3)	-	ＡＢＤＥＨ	普通	橙	30	ＨＨ42　摩耗著しい
43	土師器　坏	(13.0)	(3.5)	-	ＡＢＥＧ	普通	にぶい橙	30	ＩＩ45
44	土師器　坏	(13.0)	(3.5)	-	ＤＥ	普通	橙	40	ＩＩ45　内外面やや摩耗する
45	土師器　坏	13.4	3.6	-	ＡＢＤ	普通	にぶい橙	90	ＩＩ45　やや摩耗する
46	土師器　坏	(11.4)	3.5	-	ＢＤＥ	普通	橙	30	ＧＧ47　摩耗著しい
47	土師器　坏	(13.0)	3.6	(9.0)	ＢＤＥＨ	普通	橙	40	ＣＣ58　内外面摩耗著しい
48	土師器　坏	(13.0)	3.7	(8.0)	ＡＢＤＨ	普通	にぶい橙	40	U58　やや摩耗する
49	土師器　坏	(12.4)	4.6	(7.0)	ＡＤＥ	普通	にぶい橙	40	V58
50	土師器　坏	(11.0)	(4.2)	-	ＢＤＨ	普通	にぶい橙	15	R58
51	土師器　坏	(12.0)	4.4	(6.8)	ＡＢＥＨ	普通	橙	40	V58　内面ヘラ記号
52	土師器　鉢	(20.0)	(4.3)	-	ＢＥＨＪ	普通	黄灰	5	ＢＢ57
53	土師器　鉢	(16.0)	7.8	8.0	ＡＢＤＥＨ	普通	橙	40	ＩＩ45　底部木葉痕
54	土師器　高坏	-	(4.7)	-	ＡＢＥ	不良	橙	90	ＣＣ46　内外面摩耗著しい
55	土師器　高坏	-	(2.3)	(19.0)	ＡＥ	普通	灰褐	15	ＣＣ46　内外面摩耗著しい
56	土師器　高坏	-	(2.9)	(18.4)	ＡＢＤＥＨ	普通	にぶい赤褐	55	ＣＣ47　外面暗文
57	須恵器　壺	-	(5.8)	-	ＥＨ	良好	灰褐	10	V50

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
58	須恵器 甕	-	(4.7)	-	E	良好	灰	20	G G50
59	土師器 甕	(21.0)	8.3	-	A B H	普通	にぶい橙	30	X43
60	土師器 甕	(22.0)	6.6	-	D E H	普通	橙	15	F F40
61	土師器 壺	-	(19.5)	-	D H J	普通	灰黄褐	15	B B57
62	土師器 壺	(26.0)	(9.8)	-	A B D E H	普通	にぶい赤褐	15	Z46 内面摩耗 剥離著しい
63	土師器 甕	-	(4.6)	(15.0)	A B D E	普通	にぶい黄橙	40	V50 摩耗著しい
64	土師器 甕	-	(4.6)	8.8	A B D E	普通	にぶい橙	30	V53 やや摩耗する
65	土師器 甕	-	(3.6)	8.6	A B D E	普通	にぶい橙	40	Z48
66	土師器 羽釜	(29.0)	31.3	(11.0)	B D E H	普通	にぶい橙	70	Q58
67	須恵器 盤	-	-	-	B E H J	良好	灰	-	I I45
68	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	C C48
69	須恵器 甕	-	-	-	E H J	良好	灰	-	W50
70	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	V52・53
71	須恵器 甕	-	-	-	B E J	普通	褐灰	-	C C58
72	須恵器 甕	-	-	-	E H J	良好	灰	-	V50
73	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	I I45
74	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	I I45
75	須恵器 甕	-	-	-	E J	良好	灰	-	G G50
76	須恵器 甕	-	-	-	E H J	良好	灰	-	W50
77	須恵器 甕	-	-	-	E H J	良好	灰	-	W50
78	円筒埴輪	-	(9.8)	-	A C G I	普通	にぶい黄橙	破片	R58 外面タテハケ後ヨコハケ 内面ナデ
79	円筒埴輪	-	(10.9)	(13.8)	A B D E	良好	橙	40	R58 外面タテハケ 下端工具ナデ 内面ナデ
80	円筒埴輪	-	(5.3)	-	A B E J	普通	浅黄橙	破片	E E42 外面タテハケ 内面ナデ
81	円筒埴輪	-	(3.1)	-	A B D E H	普通	にぶい黄褐	破片	A A48 外面タテハケ 内面ナデ やや摩耗
82	土製紡錘車	径(4.0)×(2.8)cm			B E H	良好	にぶい黄橙	25	W50 厚さ2.4cm 孔径(0.8)cm 重さ11.9g
83	土錘	長さ6.8cm 直径1.6cm			B E	良好	黒褐	100	H H43 孔径0.6cm 重さ17.1g
84	土錘	長さ4.3cm 直径1.6cm			B D E	普通	にぶい橙	100	P58 孔径0.3cm 重さ9.7g
85	石製 丸鞆	長さ3.0cm 幅3.9cm 厚さ0.6cm 重さ15.3g					灰白	100	V50 風化著しい
86	石製 模造品	長さ2.0cm 幅2.3cm 厚さ0.2cm 重さ1.0g					灰黄	100	V53 有孔円板
87	臼玉	直径1.1cm 厚さ0.5cm 孔径0.3cm 重さ2.0g					灰白	100	V58
88	鉄製品	残存長9.6cm 頭頂幅3.5cm 幅0.9cm 厚さ0.5cm 重さ37.48g							V50 器種不明

いている。図の下端は使用時に紐があたって欠けたと思われる。84は完形である。

85は丸鞆である。石材は花崗岩と思われる。裏面には固定するための穿孔が見られる。表面と裏面及び側面の一部には、漆と思われる黒色の付着物が遺存している。

86は有孔円盤型の石製模造品、87は臼玉である。ともに石材は滑石である。

88は鉄製品である。一端は幅広の三角形で他端は細く尖る。断面は長方形で、厚さは三角形の部分がやや厚く先端にかけて僅かに薄くなる。

V 縄文時代の遺構と遺物

1. 住居跡

第33号住居跡（第401図）

Y・Z－43・44グリッドで検出した。西側は、2箇所の倒木痕と7軒に及ぶ新しい時期の住居跡で破壊されているが、外周壁柱穴列はかろうじて遺存しており、全体の規模が把握できる。

竪穴の平面形は長方形が基調で、短軸の壁面はやや弧を描く。長軸は約8ｍと、今調査で検出できた住居跡のなかでは、第305号住居跡とならび、最大の規模となる。

確認面からの深さは0.3ｍ前後で、覆土は黒褐色を主体とする自然堆積土であった。柱穴および壁柱穴部分の覆土はロームブロックを多く含む褐色系土で占められていたが、明らかな柱痕は発見できなかった。床面は、西方にやや低くなる気配があるが、起伏は少なく、傾斜も違和感がない。

床面には200を超える柱穴類が発見できたが、壁柱穴は、互いに浅い溝で連結されたものが二重にめぐっていた。両者は同一の軸方向を念頭にしていることから、拡張の痕跡と判断できる。西壁下の一部を共有し、北・東・南の三方に拡張の掘削を進めたと推定できる。

主柱穴は、中央部の2箇所に残された集中部の存在から、6本柱穴と考えられ、壁下に残りの4本を配置する類型となるだろう。断面Dにかかる拡張後の主柱穴は、炉跡中央を対称軸とした位置に対となる柱穴が検出できた。また、拡張前の主柱穴も、北側がやや狭まるものの、同じような梁間隔で設定されていたようである。

炉跡は、中央やや北寄りの位置に発見できた。最終次には北方を打ち欠いた土器片（第403図8、第404図14）で囲っていたようである。さらに北方にも焼土を伴う掘込みが発見できたが、こちらは拡張前の炉跡と考えられる。長軸線上での位置から見た両者の関係は、先後が逆ともとれる。しかし、短軸方向での偏りが、拡張方向に一致することから、拡張前の炉跡が壁寄りに偏在していたと推定できる。

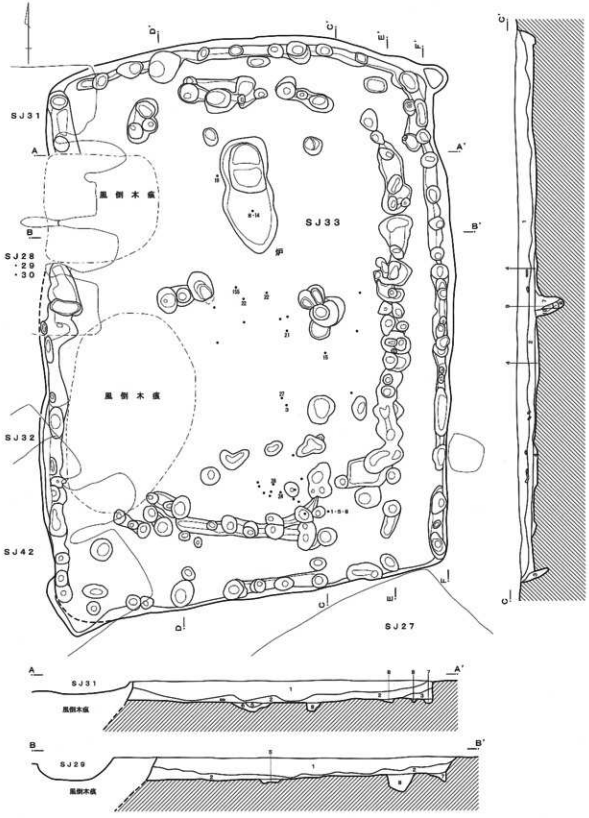
遺物は土器が主体で、接合後でも2,000点を超えるなど、大量に出土した。また、石器も今回発見の縄文時代前期竪穴住居跡では最も多く、石斧類、石鏃、敲打具、粉砕具などが出土した。土器は、若干の混在も認められるが、おおよそ関山Ⅱ前半期の文様組成と見なせるものである。

第33号住居跡出土土器（第403～408図）

前述したとおり、本住居跡からは接合後で2,000点を超える大量の土器が出土した。このうち151点を示したが、31～34の口縁部文様帯片、54～58の第一種結束羽状縄文片、59の幅狭等間隔のループ文片、132・133の第二種結束・第二種結節文片などの文様要素や構成は、いわゆる二ツ木期に多出するもので、本住居跡の帰属期に先行するものである。また、151の、爪形文を施した大型菱形文構成の口縁部片も同様である。

以上を除き、口縁部文様帯や胴部に特殊な工具文様帯を設定するものには1～4・35～51がある。無文地の口縁部文様帯を設定するものは1・35～38で、38をのぞき、竹管施文の主幹線上に貼付文を追加している。また、縄文地の口縁部文様帯には2・39～41があり、平行線を離して施文するもの(2)、集合化するもの(39～41)の2種がある。さらに、胴部などに特殊な工具文帯を設けるものには3・4・42～51があり、半截竹管や櫛状工具で鋸歯文を基調とした構図を描いたり、貼付文を集中させるなどで特別帯を作り出している。

52は、今調査で2点のみ出土した貝殻背圧痕文が残る破片である。また、53は無節斜縄文が観察できる。判断がつかなかったが、あるいはこれも151に伴う後出する破片かも知れない。

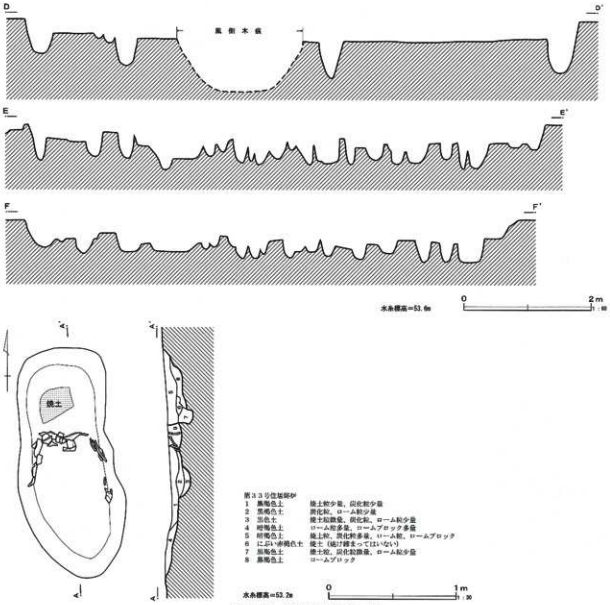


第33号住居跡
1 黒褐色土　白色粒・ローム粒少量、礫土粒、炭化粒微量
2 黒褐色土　礫土粒、炭化粒少量、ローム粒
3 黒褐色土　焼土粒、炭化粒、ローム粒少量
4 黒褐色土　ローム粒
5 黒色土　ローム粒・焼土粒・炭化粒少量
6 黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック
7 にぶい黄褐色土　ローム粒、ロームブロック多量、焼土粒
8 暗褐色土　ロームブロック
9 暗褐色土　ローム粒
10 にぶい黄褐色土　ロームブロック多量

0　2m
1:80

水糸標高=53.6m

第401図　第33号住居跡（1）



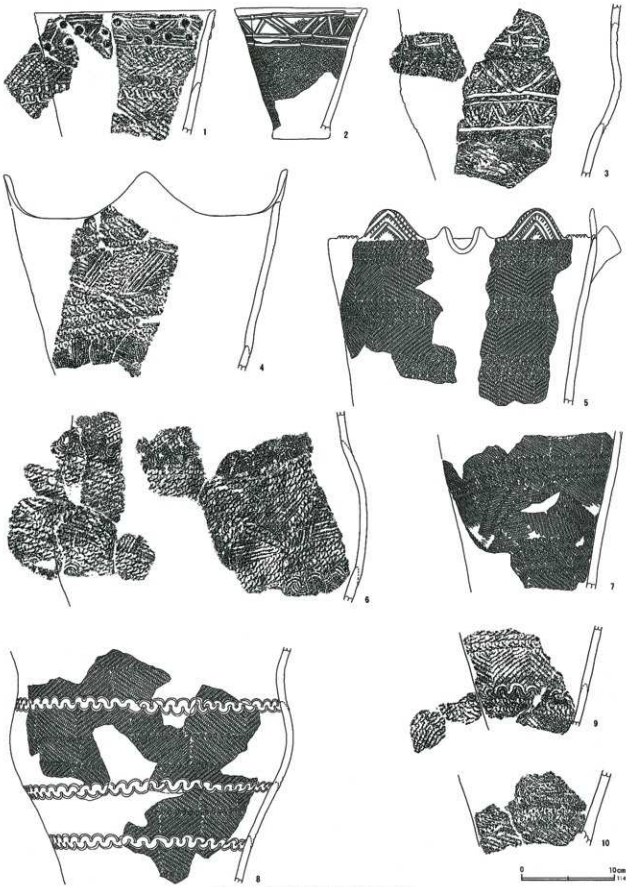
第33号住居跡(P)
1 黒褐色土　焼土粒少量、炭化粒少量
2 黒褐色土　炭化粒、ローム粒少量
3 茶色土　焼土粒微量、炭化粒、ローム粒少量
4 暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック多量
5 暗褐色土　焼土粒、炭化粒多量、ローム粒、ロームブロック
6 にぶい赤褐色土　焼土（焼け硬まってはいない）
7 茶褐色土　焼土粒、炭化粒微量、ローム粒少量
8 黒褐色土　ロームブロック

第402図　第33号住居跡（2）

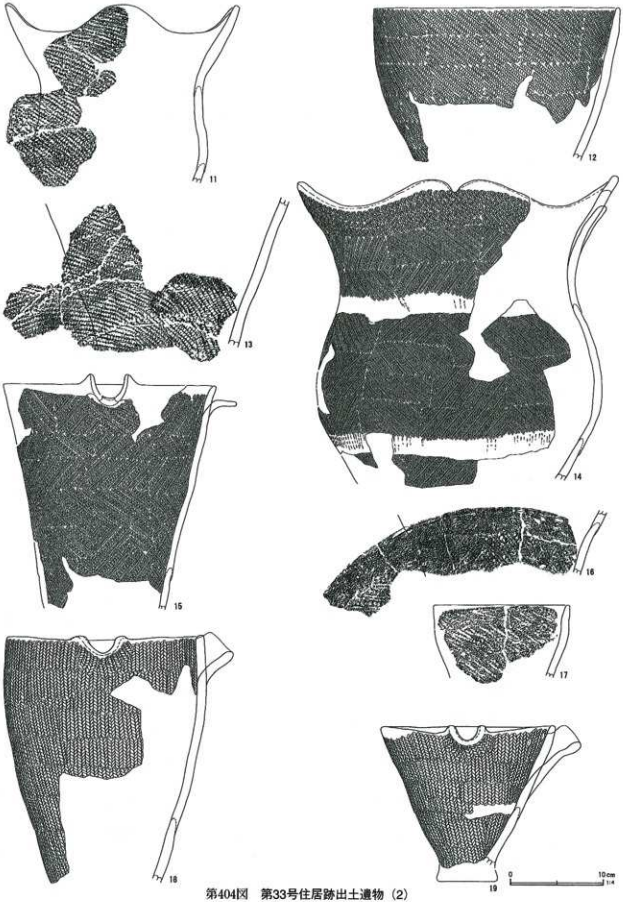
前述の先出破片を除き、単節斜縄文を施文するものは5～13・60～108を示した。出土土器の構成のうち最も大きな比重を占める。胴部の変化としてコンパス文があるが、主として成形接合部を取り繕うために施文されている。使用工具は竹管(8)、櫛状工具(9・73・92)が共存しており、わずかに支点が上下移動するものもある(92)が、多くは水平移動の描出法で施文されている。さらに、75・76は縦位の短沈線で成形接合部を覆っているが、これは今調査で多く発見できた特徴的な施文法である。

これら単節縄文施文片のうち、5～7・9・10・60～83は、ループ文が多段化し、足長の斜縄文帯の中でアクセントをつける構成である。斜縄文帯は通常羽状化するが、6・7・61～65は多段ループ帯が鍋囲文化しており、工具文の胴部特別帯と同じ効果を演出している。ちなみに、5は片口部を欠くが、両脇の半円状突起が遺存しており、片口注口土器の一部と判別できる。

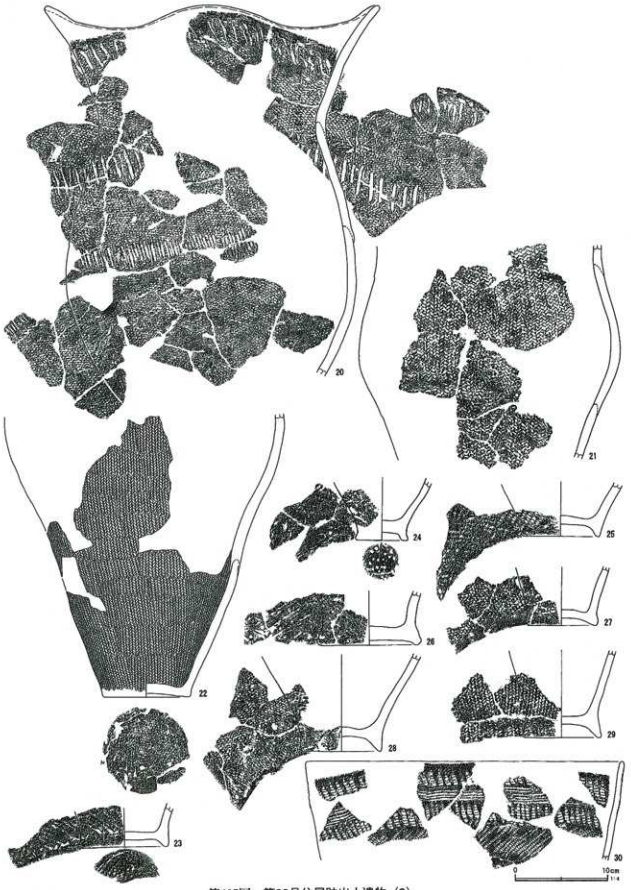
これに対し、足長の単段ループ文を繰り返し施文するものには8・84～89がある。このうち85の上位を施文した原体は、一段段階でごく細い繊維束を添えたようにも見えるが、確定できない。



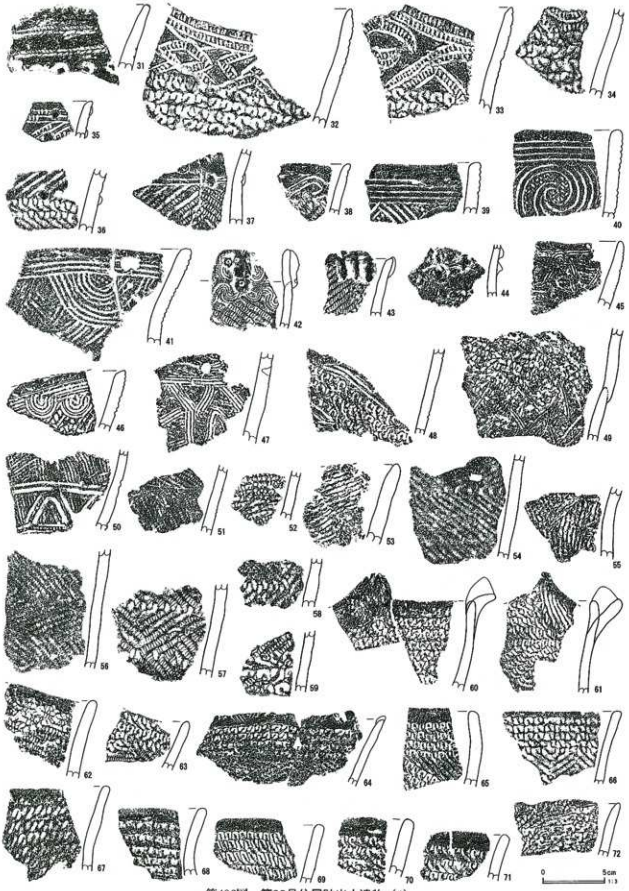
第403図　第33号住居跡出土遺物（1）



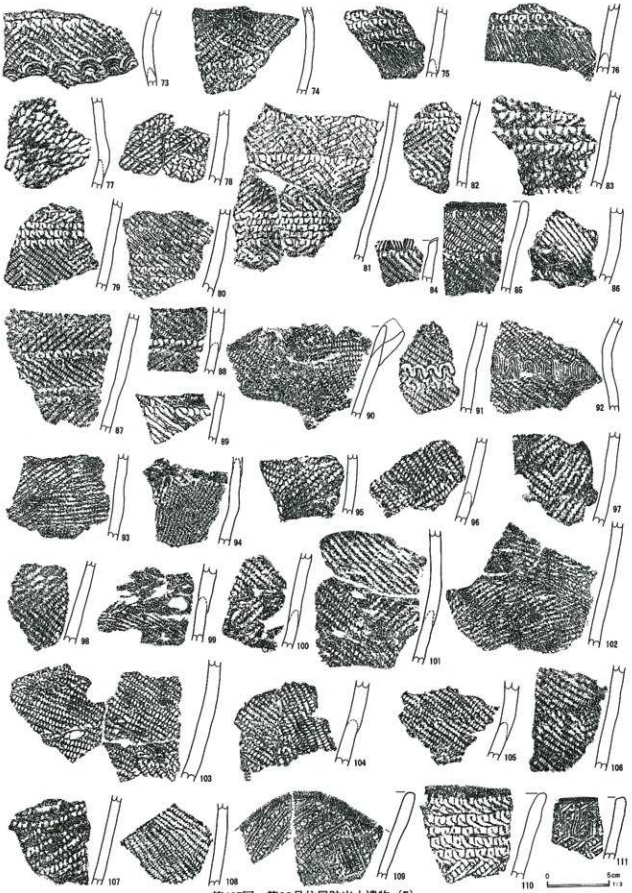
第404図　第33号住居跡出土遺物（2）



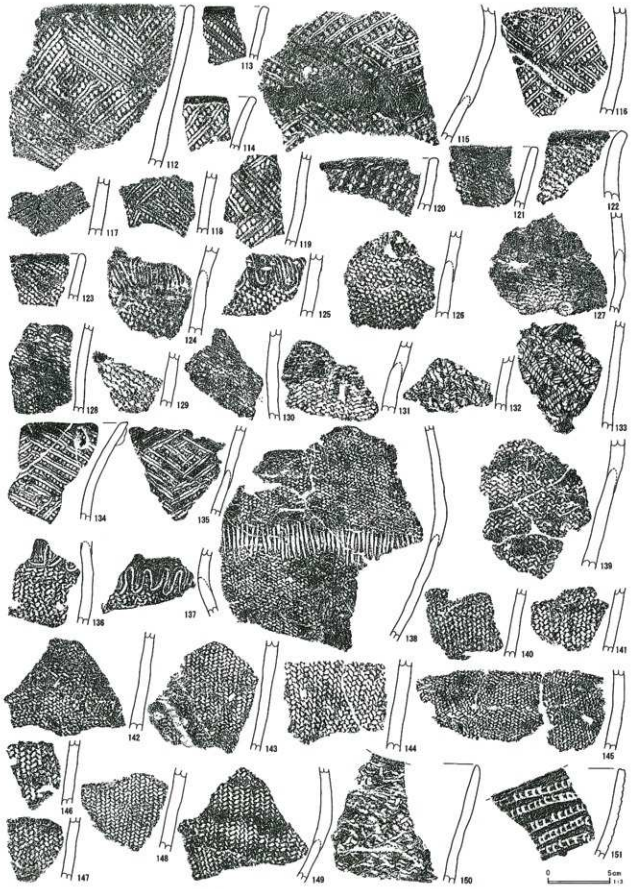
第405図　第33号住居跡出土遺物（3）



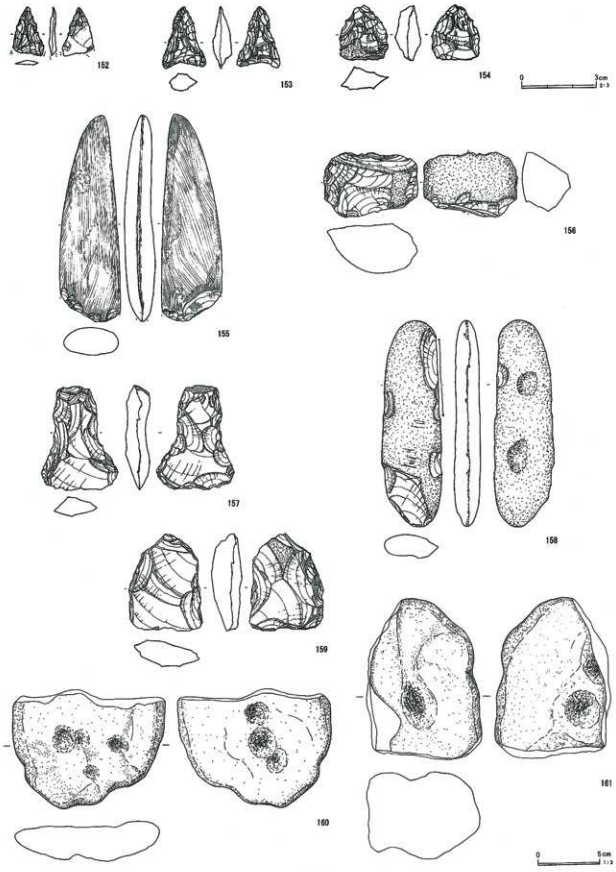
第406図　第33号住居跡出土遺物（4）



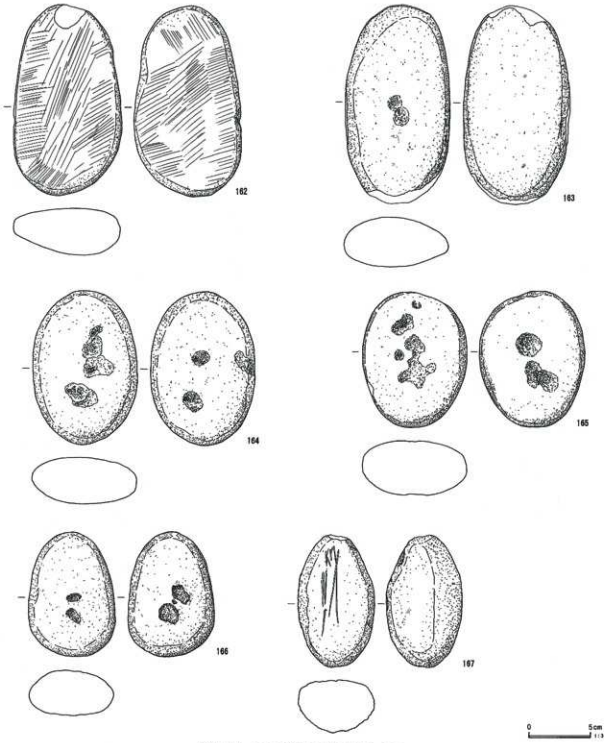
第407図　第33号住居跡出土遺物（5）



第408図　第33号住居跡出土遺物（6）



第409図　第33号住居跡出土遺物（7）



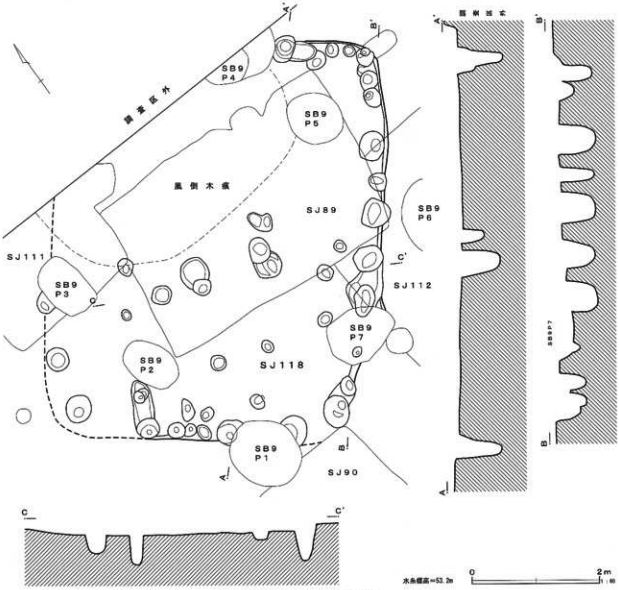
第410図　第33号住居跡出土遺物（8）

一方、施文帯間にループ文などのアクセントを介さない単節の構成は11～13・90～108に掲げた。整然とした羽状構成を作出するものは少なく、一部に0段2条から撚り進められた原体を使用する個体(12・95など)もある。

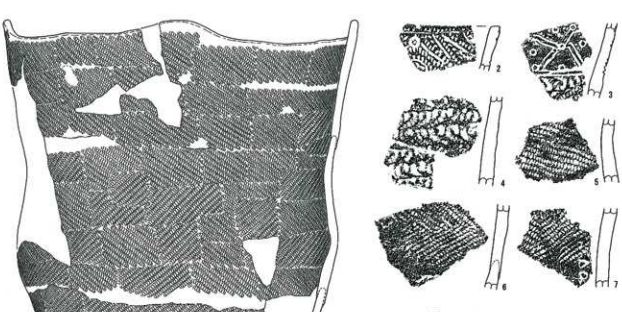
単節を除き、本住居跡で出現頻度が高い原体に、14～16・109～119の、いわゆる正反の合がある。回転痕としての異条斜縄文を観察すると、撚り合わせでなく、134・135のような附加条手法を用いた疑いのある破片(16・115)もあるが、確定できない。基

第293表　第33号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
152	石鏃	1.9	1.2	0.2	0.6	チャート	
153	石鏃	2.4	1.7	0.7	1.9	チャート	
154	石鏃	2.2	2.0	0.9	3.7	黒曜石	未製器？
155	磨製石斧	16.2	4.7	2.2	307.6	緑色岩	
156	石核	5.1	7.5	3.9	190.5	頁岩	
157	打製石斧	8.2	6.1	1.5	84.0	安山岩	炉体
158	凹み石・敲石	16.3	4.8	1.9	253.1	片岩	炉体　敲打痕あり
159	礫器	7.6	5.9	2.2	110.5	頁岩	
160	敲石	9.4	12.2	3.2	304.2	安山岩	表裏面に凹みあり
161	敲石	12.7	9.2	6.8	1096.9	安山岩	風化著しい　表裏面に凹みあり
162	磨石	15.1	8.6	3.6	790.4	安山岩	表裏磨面
163	磨石	15.7	8.3	3.9	708.4	安山岩	表裏・中央部に凹みあり　表裏磨面
164	磨石	12.1	8.3	3.6	469.5	安山岩	表裏面に敲打による凹みあり
165	磨石	10.7	8.4	4.3	541.5	安山岩	表裏面に敲打による凹みあり
166	磨石	98.0	7.0	3.6	355.9	砂岩	表裏面に敲打による凹みあり
167	磨石	10.4	6.0	4.1	143.0	安山岩	表裏に擦痕あり



第411図　第118号住居跡



第412図　第118号住居跡出土遺物

本的に、横位帯内の羽状が上下で連接する菱形をめざすようだが、14・15に見るように、単節の多段ループ構成ほどの気遣いは認められない。

120～131は、異節斜縄文と呼ばれるものとその仲間であるが、撚りあわせではなく、組紐の意図的な組み違えによって原体が製作されたものである。122などは異節の進行が観察できるが、120は用意した1段の縄が同方向であったため、複節斜縄文と類似する圧痕を残す。その他、絡げ方の微妙なちがいにより、様々な圧痕の流れが現れている。

縄文施文破片のうち、単節斜縄文の67%に次ぐ比率を占めるのが組紐縄文である。本住居跡出土縄文施文土器の12%を占め、同様な製作法を用いる擬似異節の8%と合わせると20%の高率となる。18～21・136～149がこれに相当するが、節が縦に整然と並び、擬似異節とのちがいを見せる。節単位の細かな羽状を目論んだ組紐であるが、遠目でのアクセントに乏しいため、20のように、成形接合帯と口縁部にタガ状の工具帯を設けることが多い。136・137のように、この帯はコンパス文で埋められるのがもっぱらだが、本遺跡では20・138のような短沈線で賄われることも多い。

この他、150は、附加条法に何らかの絡げを組み合わせているようだが、圧痕も不鮮明で、判断できなかった。また、23～29は底部を一括したもので、例外なく上げ底を作出している。明確な脚部を意図し、接地部を幅広く整えるものは24だけにとどまり、他は縁部が尖るなど、造り出しの成形法による。

以上の関東系土器群に加え、本住居跡では信州系のいわゆる神ノ木式土器の破片が出土した(30)。口縁下に、櫛状工具によって描いた連続刺突と横位線を交互に配置した特別帯を設け、以下、単節縄文が器面を覆う構成と考えられる。羽状構成の有無は定かではないが、他遺跡例からすると、単方向に終始すると考えられる。

第118号住居跡（第411図）

X・Y－51・52グリッドで検出したが、一部が調査区外にかかる上に、大部分が新規の掘立柱建物跡や住居跡・風倒木痕と重複しており、北方の半分は

調査不能であった。だが、かろうじて3箇所の隅部が特定でき、全体規模を推し量ることができる。

壁柱穴の配置から、竪穴の平面形は長短軸長にあまり差のない長方形と考えられる。壁面が確認できたのは東方のみであり、わずかな覆土が遺存していたにすぎない。床面はほぼ平坦で、大きな起伏は存在しなかった。

壁柱穴、および柱穴はそれぞれが独立しており、東壁下の壁柱穴列は深く、大きい。これに対し、南北壁下のそれは、深さに不足はないものの、細いのが特徴である。この期の竪穴住居跡に多い拡張跡は見つからなかった。また、主柱穴は、断面A中央の柱穴の存在から、6本と推定できるが、北方にやや開くように配置されたと考えられる。炉跡は、北方に存在したと思われるが、風倒木により破壊されたようである。

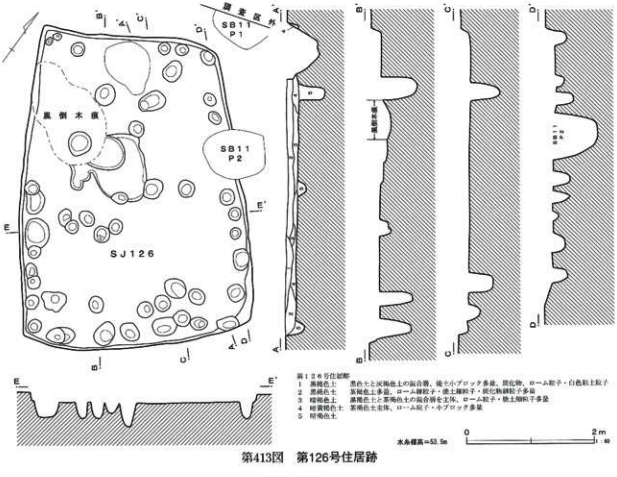
遺物は、覆土から出土した土器がもっぱらで、石器製品は出土していない。土器の様相は、ループ文と組紐文の欠落より、奥東京湾域での黒浜初頭期に相当する時期の所産と考えられる。

第118号住居跡出土土器（第412図）

出土土器は、前述のように発見量が少なく、しかも、掲載できた資料は時期的に大きく二分される。

2～4は円形竹管文を結節点に追加する口縁部文様帯の構成や、幅狭で等間隔のループ文構成より、いわゆる二ツ木段階の資料と考えられる。

これに対し、1・5～8は、時期を隔てた黒浜初頭期に製作されたものと思われる。1は、整然とはしていないものの、単横帯ごとの単節羽状構成が観察できる。しかし、羽状構成は成形接合部を境とした下二段のみで、最上段はほとんどが0段2条原体を用いた単方向の施文に終始している。胴部の膨らみはやや屈曲するかのようで、自然な曲線を基調と



第413図　第126号住居跡

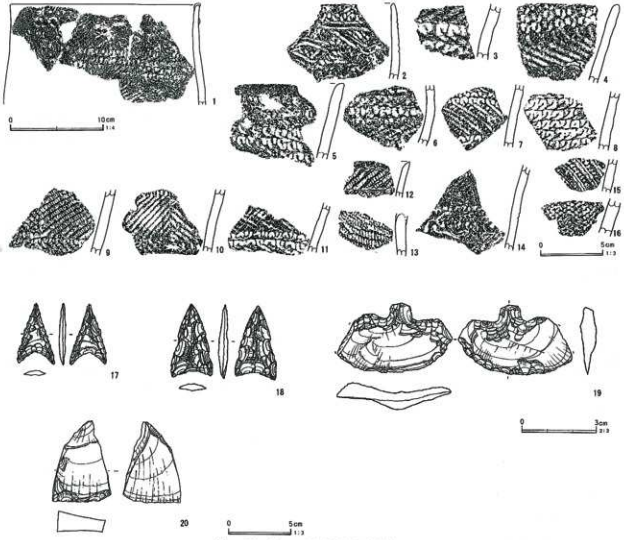
する関山式一般のそれとは一線を画す。また、1・5～7は同一個体の可能性が強い。

この他、8の異条斜縄文があるが、1段の圧痕となる条が撚り戻っている。撚りあわせによる原体製作よりは、附加条法の絡げ方向が附加縄と逆であったと考えるのが妥当だろう。

第126号住居跡（第413図）

W・X－43・44グリッドで検出した。後出する風倒木痕や掘立柱建物跡の柱穴などに一部が破壊されるものの、遺構の全体相を見てとるのに大きな妨げとはなっていない。

竪穴の平面形は、やや北方にすぼまる長方形で、北西の隅部がやや突出する。覆土は、上層が他の前期住居跡と共通する黒褐色土であるものの、下層は暗褐色から暗黄褐色系の土が発見でき、ロームの小ブロックが多量に混入していた。この下層土は、近接する他住居の構築時に余分な掘削土が投棄された



第414図　第126号住居跡出土遺物

第294表　第126号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
17	石鏃	2.5	1.5	0.2	0.6	黒色ガラス質安山岩	
18	石鏃	2.9	1.7	0.3	1.4	メノウ	
19	石匙	1.8	4.5	1.0	7.1	チャート	
20	スクレイパー	6.4	4.6	1.7	49.0	頁岩	

ともとれる。

床面は、多くが平坦であり、中央には小規模な段差を発見した。だが、焼土や炭化物の集中が見られず、炉跡と認定するに至らなかった。

壁柱穴は壁下にのみ確実な列が認められる。だが、B・C断面に見るように、南壁の内側にも1列が認められる可能性があり、その場合、妻側一方向への拡張の痕跡と判断することになる。

主柱は、中央に相応する規模のものが発見できず、北側が壁から隔たった場所に位置することから、南壁直下の2本と組になり、桁側が狭い4本の配置になると考えられる。

遺物は、覆土から出土した土器破片が主体だが、接合後の点数は200にも満たない。また、石器も小型剥片石器が多い。土器の文様要素や構成の取り合わせからすると、住居跡は関山Ⅱ初頭期に埋没したと考えられる。

第126号住居跡出土土器（第414図1～16）

本住居跡からの土器出土量は少ないが、図示した資料については、ほぼ単一の時期相を示していると考えられる。

明確な下位区画線を伴う口縁部文様帯を設定する資料は小片が多く発見できたが、図示できたのは1・2のような縄文地に特例的な工具文や貼付文帯を設けるもののみである。

もっぱら縄文による構成をとる資料は3～14の単節斜縄文が90%を占める。このうち3は、ループ環部の大きさから、幅狭の等間隔構成を繰り返す構成と考えられ、他の出土土器より先行するだろう。4～11は多段のループ文構成を介在させるもので、出土単節施文破片の半数以上を占める。また、12～14は施文帯間を強調しないものである。いずれも0段多条のしっかりと撚り込んだ原体を使用している。

これに対し、15はいわゆる正反の合原体を回転施文している。また、16は組紐を意図的に組み違えた原体を回転施文し、異節斜縄文と同じ視覚効果を得ている。

第129号・第131号住居跡（第415図）

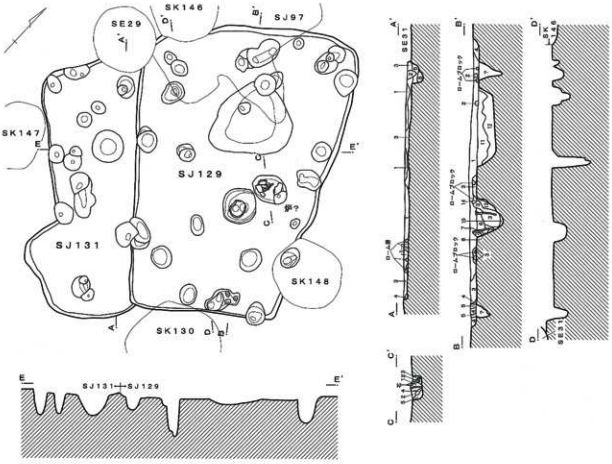
Ⅴ・W－56・57グリッドで検出した。2軒が重複しているため、一括して報告する。新しい時期の竪穴住居跡と5基の土壙に破壊されているため、全体像が把握しにくく、加えて、第131号は遺物量も少なく、時期差も捉えにくい。結局のところ、両者の先後は決定できなかった。

平面形は、第129号が北方に開く長方形に近い逆台形、第131号は長方形と考えられるが、後者は南東隅部がふくらんでおり、土壙との重複もふまえておく必要がある。

確認面からの深さはわずかであるため、両住居跡とも床面直上の暗褐色土が主体の覆土であった。床面は平坦で、第129号では中央に2個体の土器がそれぞれ別の穴に埋設されていた。B断面にかかる掘方には第416図1が埋設されており、C断面の方には同図2の個体が埋め込まれ、加えて、不完全ではあるが、石囲いされていた。このうち、後者の土器内には焼土が認められたため、炉跡と認定したが、明確な炉床や赤化面が確認できず、確定はできない。また、両者に先後を認める根拠はなく、他遺跡における同時期の竪穴例に類例があることから、隣接のまま共存していたと考えた。

この他、柱穴類は主として壁際に発見でき、第129号では各壁下に3～4本が配されていたようである。これに対し、第131号では西壁下で同じような傾向があるものの、第129号住居跡内に連続しない。あえて認定するとすれば、埋甕西方の3穴が西壁列と平行するものとして挙げられるが、推定される竪穴形態の短軸がやや狭すぎるきらいがある。

遺物は、埋設土器の2個体と第129号の打製石斧2点を除くとわずかで、土器では混在も認められる。第129号は、埋設土器2個体より、いわゆる新田野段階直前の花積下層末期に構築されたと考えられる。対して、第131号は、帰属が確定できる土器片が少



第415図　第129・131号住居跡

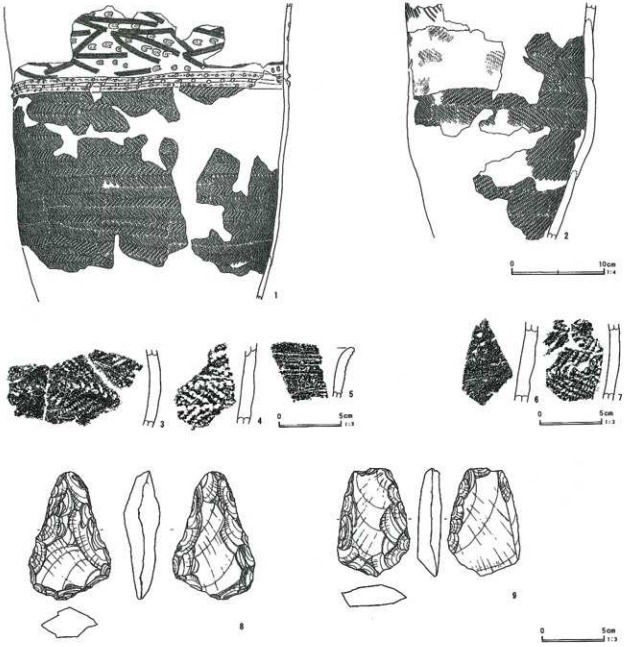
なく、図示した破片は埋設土器と時期差が認めがたいものであった。

第129号・第131号住居跡出土土器（第416図１～７）

図示した７点のうち、１～５が第129号出土、６・７が第131号出土と認定したものである。

１は、複数の細隆帯で口縁部に幅広の文様帯を区画する類型で、３本が組となる撚糸側面圧痕文と竹管による刺突文が施文される。刺突文は、円形竹管文にかわるものとして撚糸側面圧痕の余白に充填されている。撚糸側面圧痕文は断片的で構図が定まらないが、おぼろげに見てとれる横位方向線によって多段に仕切られていたようで、撚糸側面圧痕文による構図が単段化する直前の文様帯構成と認めることができる。胴部は第一種結束を介する羽状縄文が展開するが、横帯が狭めで、次段階に続く要素が萌芽しつつある。器壁が極端に薄いのは、東海系土器の影響を受けたもので、この期にまま見受けられる土器作りの指向である。

もう一つの埋設土器である２は、帯間線強調のない幅の広い羽状縄文の上位に斜線の連続が見てとれる。文様帯区画線は存在せず、どのような構成が展開したか想定できない。円形刺突文などの素文を口縁部に集中させる類型にあたるのだろうか。



第416図　第129・131号住居跡出土遺物

第295表　第129号住居跡出土石器観察表

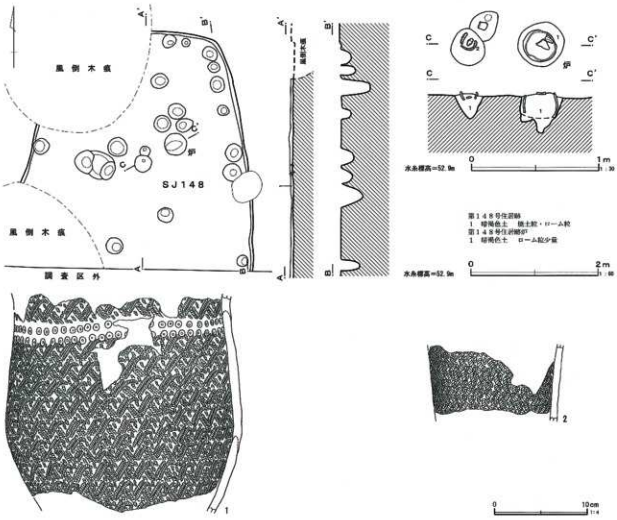
番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	細考・出土位置
8	打製石斧	10.1	6.6	2.4	141.3	黒色ガラス質安山岩	
9	打製石斧	8.5	5.3	1.7	125.6	ホルンフェルス	

覆土中出土のうち、3は第一種結束が認められるもの、4はループ文が連続するもの、5は竹管による平行沈線が残るものだが、4・5は本住居跡の主体期より新しい時期の所産だろう。

これに対し、第131号覆土中より出土した2点のうち、6は刺突文がわずかに認められ、7は第一種結束部の回転により帯間線強調を目指すものである。

第148号住居跡（第417図）

V・W－50グリッドで発見した。推定範囲の南



第417図　第148号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

1/4は調査区外となり、西と北西は新しい風倒木痕によって破壊されている。しかし、北東隅部と東壁は遺存しており、柱穴の配置から大まかな全体規模を概算することも可能である。

遺存部分から推するに、平面形は南方にやや開く台形で、長軸方向はおおよそ5ｍ前後の規模となろう。東壁の膨らみからすると、南壁も弧を描くように掘削されていると考えられる。

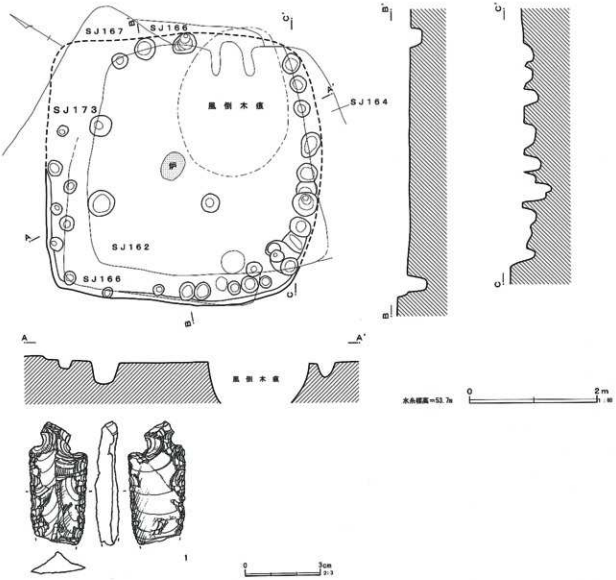
確認できた覆土はほとんどなく、床面直上の暗褐色土がわずかに残るのみであった。床面は平坦で、中央やや北東寄りに上下を切断した2個体の埋設土器を発見した。このうち、第417図2を据えた南西方は、土器の径が小さいため、北東方の埋設穴を炉跡と認定した。しかし、焼土や外周の赤化など、継続使用を証明する根拠は発見できていない。

この他の柱穴類は、壁柱穴列と中央小穴群に二分できる。中央の小穴はいずれも浅く、規則性も認められないため、主柱穴とは認めがたい。

遺物の出土は、埋設土器に限られているが、2個体の施文縄文原体と構成法により、いわゆる二ツ木期と判断できる。

第148号住居跡出土土器（第417図）

1は第二種結節部の回転痕を全面に施文する。器形曲線からして、おそらく波状口縁を呈するだろう。現状で2段が残る成形接合部のうち上位の方では円形竹管文を横位に連続させて接合部の違和感を取り繕っている。また、2は環の大きいループ文を幅狭



第418図　第173号住居跡・出土遺物

第296表　第173号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
1	石匙	4.9	2.3	0.9	9.5	チャート	

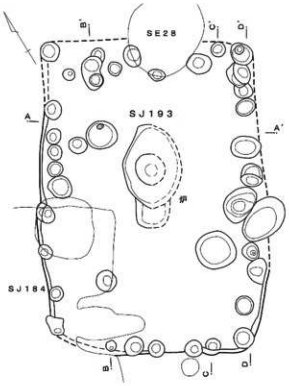
かつ等間隔で連続施文する構成が残る。

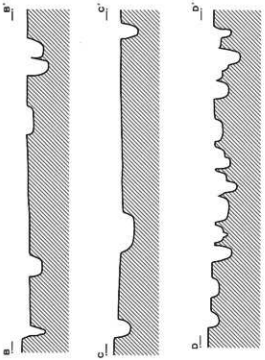
第173号住居跡（第418図）

Z－44・45グリッドで検出した。住居跡廃絶後、倒木による攪乱にあい、さらに古墳時代以降の5軒の住居跡が入れ替わり構築され、上層は壊滅したようだが、幸いにも、南西壁が破壊を免れ、他の壁下にも柱穴列が発見できたことから、全体規模の推定が可能となった。

推定できる平面形は隅の丸い方形で、覆土はほとんど検出できなかった。壁際には柱穴列がめぐるが、とくに東壁下の密度が濃い。中央部には火床面のみが残る炉跡を認めるものの、明確で規則性を認めうる主柱穴は存在しない。

遺物は、石匙1点を発見したのみで、構築期を推し量ることのできる土器は出土しなかった。しかし、

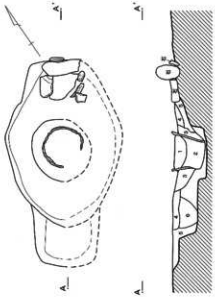




第193号住居跡
1 暗褐色土　焼土粒子多量、黄褐色土少量、茶褐色土・ローム粒子多量
2 暗茶褐色土　暗褐色土主体、明褐色土・ローム粒子・ローム小ブロック多量
3 茶褐色土　暗褐色土主体、ローム粒子・褐色土多量
4 暗黄褐色土　茶褐色土
5 暗褐色土　ローム粒多量

水糸標高＝53.4m

0　2m
1:60

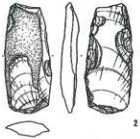


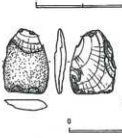
第193号住居跡P1
1 黄褐色土　焼土粒・黒化粒微量、ローム粒多量
2 暗褐色土　明褐色粘土粒・黒色土多量
3 暗褐色土　ローム小ブロック多量、2層主体
4 暗茶褐色土　暗褐色土主体、黄褐色土小ブロック・ローム小ブロック多量、炭化粒
5 暗褐色土　褐色土主体、黒色土・ロームブロック多量
6 暗褐色土　黒褐色土主体、褐色土・ロームブロック多量

水糸標高＝53.4m

0　1m
1:30

0　10cm
1:4





0　5cm
1:3

第419図　第193号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第297表　第193号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
2	打製石斧	8.7	3.8	1.2	53.8	頁岩	
3	打製石斧	5.1	3.6	0.9	17.7	頁岩	

壁柱穴列の様相から、前期前葉のいずれかに造営されたと判断できる。

第193号住居跡（第419図）

W－48・49グリッドで発見した。検出時より北方の床面が露出していたが、壁下の柱穴列より、全体規模の算定が可能となった。南西隅と北壁の一部には新しい時期の住居跡と井戸が重なるが、重複住居跡は本住居跡の床面まで到達しておらず、壁柱穴の確認にも支障がなかった。

推定できる竪穴の平面形は長方形で、南方に遺存した覆土は、床面からの厚さを反映して、主に暗い褐色系土で占められていた。中央やや北寄りで長楕円の掘込み中に土器を埋設する炉跡を発見した。

炉跡は、北をが辺石によって限り、南に小穴を絡める構造となっている。中央には上下を切断された大型の深鉢胴部が埋設されている。埋設に伴う埋戻しは土器内にも行われたようで、土器を外周から支える炉土層の第3層だけでなく、土器内の第2層までが埋戻しを彷彿させる特徴があった。

一方、柱穴類は、壁柱穴が一周のみ壁下にめぐるが、そのなかや中央部にも、他より抜きんでた主柱穴を思わせるものが存在しなかった。

遺物は、埋設土器と2点の石斧が主なもので、図示できる土器片は他に出土しなかった。埋設土器の文様要素や構成から、本住居跡は二ツ木末期に構築されたものと判断できる。

第193号住居跡出土土器（第419図1）

1は、有口縁部文様帯の構成をとる個体で、竹管による爪形気味の梯状沈線で蕨手状文や鋸歯文を描く。また、余白部には円形竹管文が充填され、これは、文様帯下位区画線にも主描線の沈線とともに用いられている。

また、数は少ないものの、貼付文も一部に加えられる。文様帯下位区画線上では3個が一組となり、一定間隔で配置されており、規則性があるようだが、文様帯内では基準が認められない。胴部の成形接合部にも口縁部にみる下位区画線と同じ横帯をめぐらしており、土器の径からして、さらにもう一帯の特別帯が底部近くに存在したと考えられる。縄文は、第一種結束を利用した羽状縄文が大部分を占めるが、実測図右下ではループ文が印される部分がある。ループ文が追加された理由はよくわからない。

第196号住居跡（第420図）

X－48グリッドで発見した。竪穴の大部分が西側の調査区外にかかり、かつ南側のZグリッド調査中にはこの住居跡の存在に気づかず、施工を迎えてしまった。その結果、検出できたのは東壁のみとなり、北端に隅部らしき壁の屈曲を見るものの、全体の規模は推定できない。

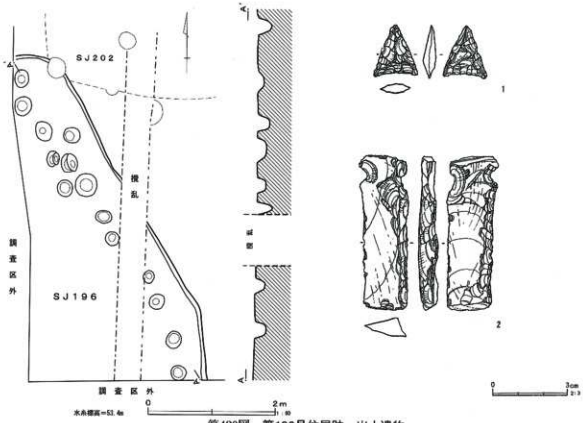
東壁下の柱穴列を見る限り、竪穴の平面形は隅の丸い長方形となる可能性が強い。確認面から床面までの深さはほとんどなく、覆土の特徴を見極めるに至らなかった。

床面は平坦で、東壁下でやや間隔を置き壁柱穴列がめぐる。中央部に小穴はないが、竪穴の推定規模からして主柱穴を配置する可能性も強い。

遺物は、石鏃と石匙がそれぞれ1点ずつ発見されたのみで、土器は出土しなかった。しかし、今回調査の縄文集落の構成と、壁柱穴列の存在から、本住居跡も縄文時代前期前葉に構築されたと見なしても大過ないだろう。

第202号住居跡（第421図）

W・X－48グリッドで発見したが、3軒の新期住居跡と土壙・攪乱などに破壊され、しかも壁面を検



第420図　第196号住居跡・出土遺物

第298表　第196号住居跡出土石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考・出土位置
1	石鏃	2.1	1.7	0.4	1.3	黒色ガラス質安山岩	
2	石匙	6.1	2.0	0.8	12.9	チャート	

出することができなかった。しかし、下層に遺存した壁柱穴列の配置から、おおよその規模が推定できる。それらを結ぶと、竪穴の形態は長方形であった考えられ、構築期に見合う位置に炉も検出できた。

竪穴の形態は、外周の壁柱穴列をたどると長方形と推定できる。壁柱穴は間隔を置いてほぼ全周するが、拡張の痕跡はなく、また、主柱穴として特定できるものはない。

これに対し、炉は、長方形竪穴住居跡の相場通りの中央やや北寄りで発見できた。内部には第422図1の上下を切断された土器が埋め込まれていた。C断面の第3・4層が埋設時の埋め戻し土にあたり、黒褐色から暗褐色を呈する第1・2層が覆う土器内は、使用時開口していたようである。

遺物は、埋設土器以外には発見できなかった。しかし、この土器の文様構成の特徴から、本住居跡が二ツ木期に構築されたことが判断できる。

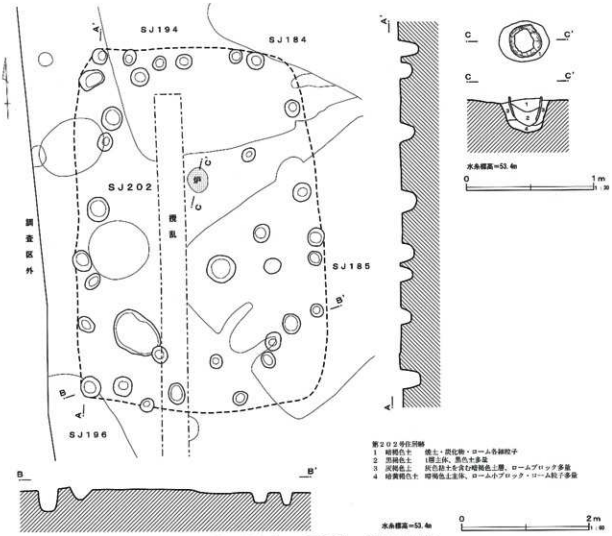
第202号住居跡出土土器（第422図）

炉への埋設を前提として上下を切断されているため、全体の構成は想定できないが、現存部分では大きめのループ文によって幅狭の横帯区画を作出している個体である。

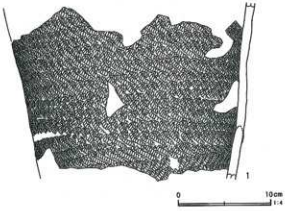
第203号住居跡（第423・424図）

CC－41・42グリッドで検出した。溝や井戸、そして風倒木痕などに一部破壊されているが、ほぼ全容を把握できた。第33号住居跡とならび、今回調査した前期住居跡の中でも最大規模のものである。

竪穴の平面形は、ほぼ長方形で、掘方では東壁が



第421図　第202号住居跡・遺物出土状況

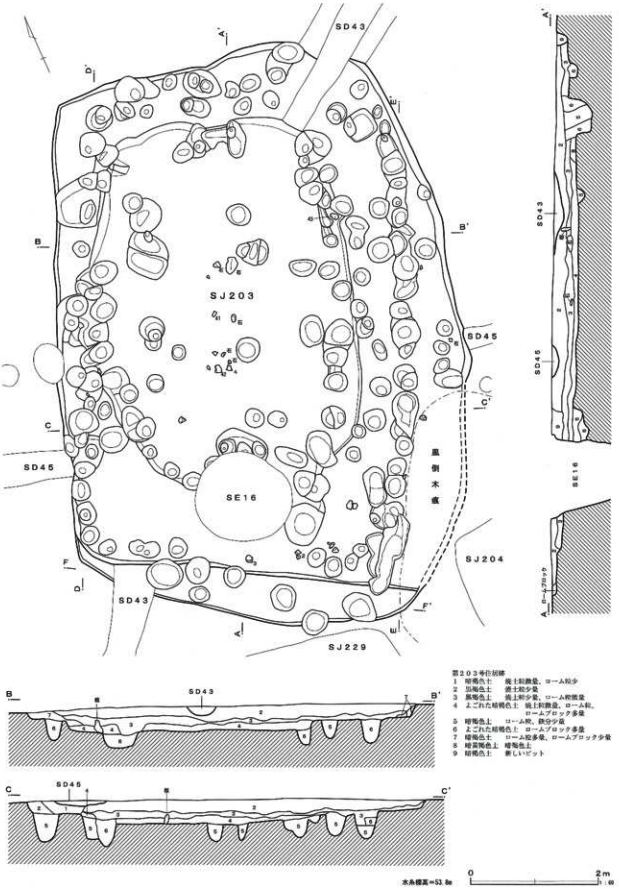


第422図　第202号住居跡出土遺物

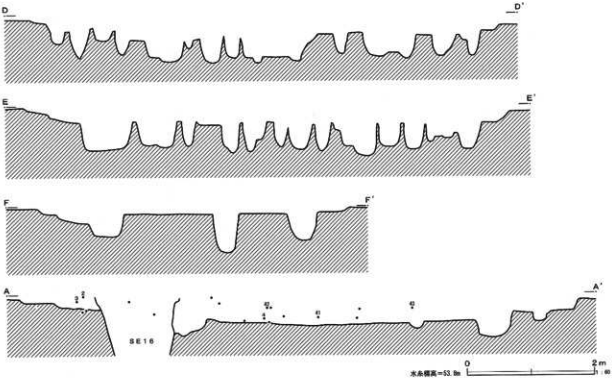
やや弧を描く。覆土は、焼土粒子などを少量含む黒褐色系土が上層の主体であった。

柱穴類は壁柱穴列を中心に多数が発見できた。これらは、少なくとも二重にめぐっており、その軸方向も一致することから、拡張の痕跡と判断できる。内側の列は西壁下の一部を外側と共有するのみで、他は大きく内側をめぐる。大胆な拡張が行われたと判断できる。

床面には内側の壁柱穴列を目安とするような段差があり、その部分の覆土には大量のロームブロックが混入していた。これらのことから、拡張時の掘削土をもって旧竪穴を若干埋め戻し、新住居では床面を一段高く設定したと推定できる。旧柱穴もこれに伴い部材の引き抜きや埋め戻しが行われたのだろう



第423図　第203号住居跡（1）



第424図　第203号住居跡（2）

が、発掘時に検証することはできなかった。

二次にわたる造営に際し上屋を支えた主柱穴は、深さや掘方の径に秀でたものが存在せず、特定できなかった。だが、住居跡の形態と規模からして、壁柱穴のいずれかに4穴、中央に2穴の6本が基本となる類型と推定できる。中央の主柱は、拡張前は断面Bラインの直北あたり、拡張後は直南あたりがあてられていたのだろう。

一方、炉跡は、拡張前後ともに特定することはできなかった。この期に典型的な住居形態にも関わらず、炉跡が設けられなかったとは仮定できず、結果的に炉跡の認定を妨げる何らかの状況を見抜けなかった可能性が大きい。例えば、一次の炉は拡張時に破壊され、二次の炉は充分な火床面の形成を経ずして住居が廃棄されたため、埋め戻し土の中で紛れてしまったともとれる。その位置としては、礫が散在していた中央やや北側などが考えられる。

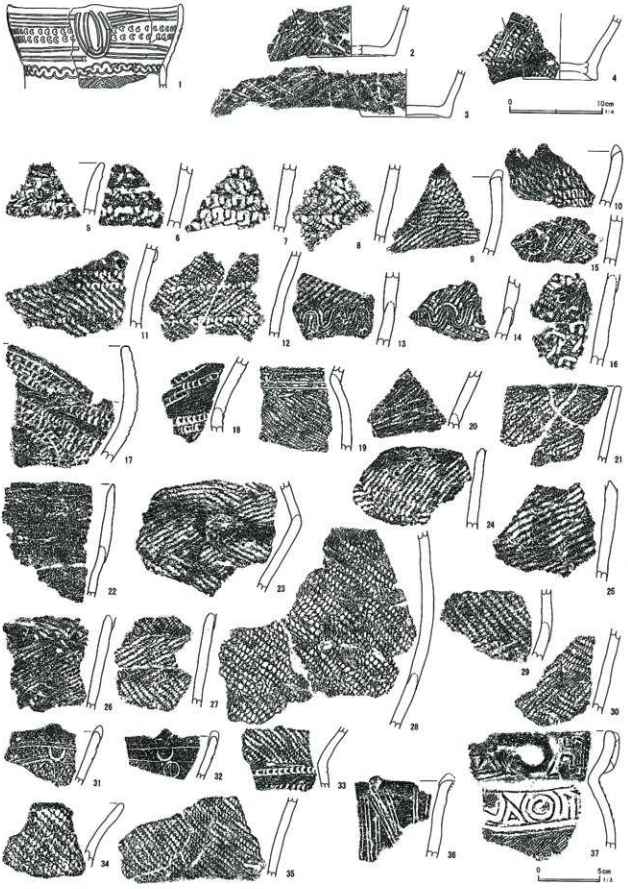
遺物は、主として覆土中から出土した。石器製品は、石斧類と粉砕具を中心に6点が出土した。これに対し、土器は、推定できる造営期が今回発見できた住居跡群でも最終にあたり、しかも大型住居跡の埋没に期間を要したためか、破片が多く、混在も著しい。主体となるのは、大宮台地の黒浜期前葉から中葉にかけて相当する破片である。

第203号住居跡出土土器（第425図1～37）

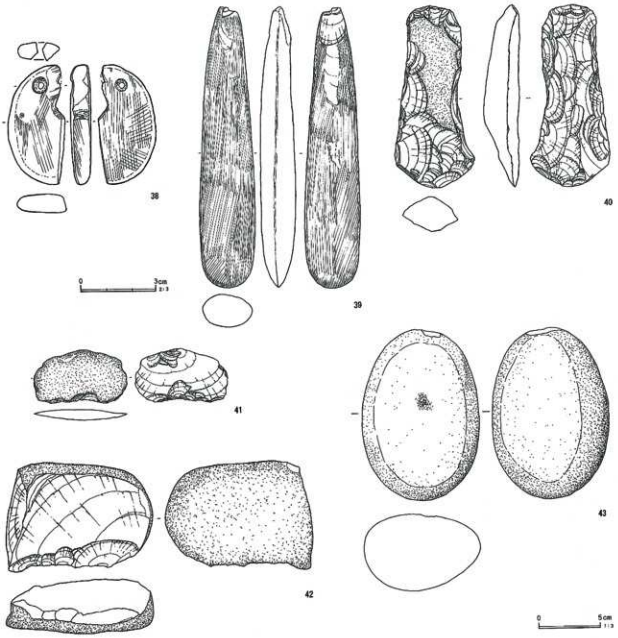
本住居跡より出土した土器は大半が破片であり、しかも、前期全般にわたるものが混在している。土器群は大きく四つの時期に分かれ、さらにその群内でも微妙な時期差が認められる。

第一の群は2～16に示した広義の関山式土器で、2・5～13は単節斜縄文がもっぱら施文されている。このうち、5～8は環の大きいループ文が等間隔に施文される。また、ループ文が集合化したものが9～11、単段で足長の構成をとるものが12、そして13は破片内で帯間線強調が認められないものである。さらに、3・4・14・15は異条斜縄文、16は第二種結節部の回転痕が印されているものである。

第二の群は関東南部の黒浜期にあたる時期の所産で、1・17～30がこれに相当する。1は胴部縄文の



第425図　第203号住居跡出土遺物（1）



第426図　第203号住居跡出土遺物（2）

第299表　第203号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
38	扶状耳飾	4.7	2.3	0.8	14.0	滑石	
39	磨製石斧	22.2	4.2	2.7	448.2	片岩	
40	打製石斧	14.3	6.4	2.8	243.1	安山岩	
41	礫器	4.2	7.4	0.8	30.7	黒色ガラス質安山岩	
42	礫器	8.6	11.7	4.3	518.1	ホルンフェルス	
43	磨石	13.5	9.4	6.1	1015.1	安山岩	表面敲打による凹みあり

横位工具文系土器で、低い波状口縁の波頂部を目安に縦位区画を配置し、その間に平行沈線・連続刺突・コンパス文などの横位線文をめぐらせている。また、17～20は上越系の大型菱形文土器で、17・18は爪形文、19・20は列点状刺突文によって菱形文を構成している。

21～30はこの期にあたる縄文施文片であるが、21～26は無節斜縄文を、27～30は単節斜縄文を押捺し

ている。一部にみられる羽状構成は、単段の施文帯ごとに原体を持ち替えているものが多く、1というよりは、17・18などの典型的な大型菱形文土器に伴うものと考えられる。

第三の群は、31～35に示した竹管文系諸磯a初期の所産である。31～33は枠状文系の類型で、34・35はこれらに伴う全面縄文施文土器である。

そして、第四の群は前期末葉にあたるもので、36は諸磯c期に相当する縦位の荒い格子文土器である。また、37は南東北の大木6式に主体的な鉢形土器で、正面の隆帯渦巻きを中心として、口縁下と肩部に設けた二段の横帯内を微隆起線文で加飾する。

第269号住居跡（第427図）

ＤＤ－49グリッドで発見した。南側を溝に破壊され、長軸長を計測できないが、縄文時代前期前半の住居跡形態の相場からすれば、ほぼ全体に近い範囲を調査できたと考えられる。

推定できる竪穴の平面形は隅部が丸みを帯びる長方形で、確認時には数㎝の覆土が残るのみであった。床面直上の覆土は通常褐色味を帯びるのであるが、ここでは他住居跡の上層で見られる黒褐色土が堆積していた。

床面はほぼ平坦で、壁際に間隔を置いた柱穴列がめぐる。壁柱穴が単列で、この住居跡では拡張を行わなかったようである。中央部に穿たれたものも含め、柱穴類は皆径が小さく浅めで、主柱を特定できなかった。

炉跡は中央北寄りで検出できた。長楕円で大きい掘方の北部には棒状の礫が1点出土したが、炉辺石とは確定できない。これに対し、南方には下部を切断した深鉢が埋め込まれていた。この期の炉辺に埋め込まれる土器は燃焼部と接しつつも別の掘方を設けるものが多い。だが、この住居跡の場合、燃焼部下まで掘方が延び、燃焼灰を含む層も土器のさらに南に分布していることから、付属施設ではなく、一連の機能の中で利用されていたと考えられる。

遺物の出土は極端に少なく、埋設土器の他には磨石製品1点が目立つ程度である。だが、本住居跡の構築期は、埋設土器から二ツ木期と判断できる。

第269号住居跡出土土器（第427図1）

1は、大きい環状末端部を幅狭等間隔に全面施文する。現状で2箇所の成形接合部が残るが、両所にはさまれた中段は、はじめに上位のループ文を逆さに転がし、その後に下位のループ文を順方向に施文するというかわった手順を踏んでいる。

第270号住居跡（第428図）

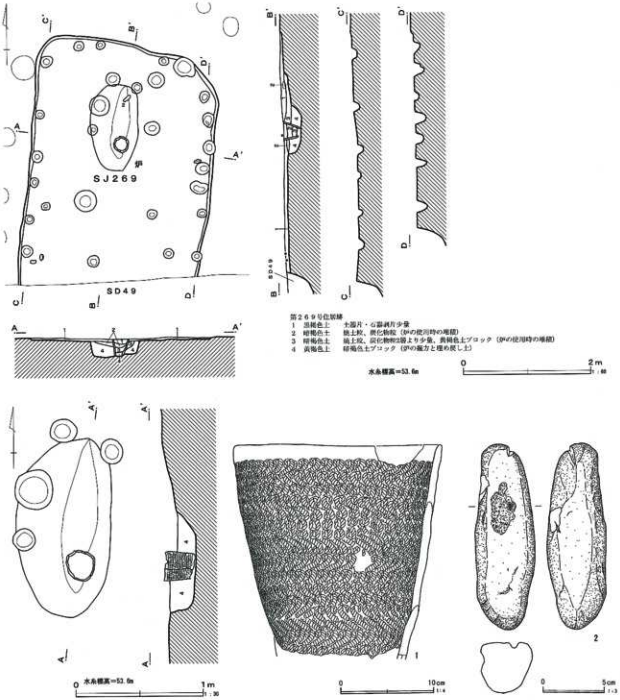
ＥＥ－48・49グリッドで検出した。南東の1/4を風倒木痕に破壊されているが、3箇所の隅部を発見できており、竪穴形態や規模の推定に支障はない。すぐ北で発見できた第269号住居跡と軸を同じくするが、こちらの竪穴形態はほぼ正方形で、他の縄文住居跡と異なり、隅が丸みを帯びない。

確認面から床面までかなりの深さがあったので、しっかりとした覆土が確認できた。他の縄文住居跡では上層に黒褐色土が分布することが多いが、こちらはやや明るい暗褐色で占められている。

検出できた床面はほぼ平坦で、壁際には小溝を交えた柱穴列がめぐる。内側にこれに相当するものがないため、拡張は行われなかったと判断している。中央にも小穴が散在するものの、いずれも浅く、主柱穴として規則的な認定に及ぶものはなかった。

炉跡は、中央やや北寄りで楕円の掘込みを伴って検出できた。中央に北方向の空間を受ける形で土器大片が埋め込まれていたが、その位置から、炉辺を限る目的ではなく、炉床を分割利用する目安として設置されたと推察できる。

この他、東壁と南壁直下に床面が赤化している箇所を発見した。両所とも各壁を等分する位置にあることと、正方形というめずらしい竪穴形態と合わせ、意図的な施設ともとれるが、具体的に特定することはできなかった。



第427図　第269号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

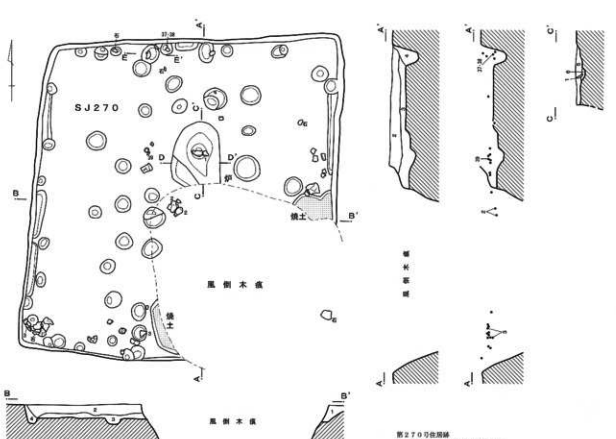
第300表　第269号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考・出土位置
2	磨石	14.6	4.7	4.0	376.9	砂岩	表面敲打による凹みあり

遺物は、覆土下層より土器大片が比較的多く出土した。石器は石匙や石斧類が出土している。炉に埋設されていた大型破片より、本住居跡は関山Ⅱ期に構築されたと判断でき、覆土中よりの土器片も大きな時間差を持つものはない。

第270号住居跡出土土器（第429・430図1～36）

本住居跡では、接合後343点と、今回検出の縄文



第428図　第270号住居跡

時代前期住居跡の中では比較的多くの土器が出土しているが、器形の全容を推し量れるものは少なく、3点にとどまった。

口縁部文様帯を設定するものは、1・2・4～6に示した。多くが管内痕を残す肉彫状の平行沈線を集合化させて主幹となる文様を描く。さらに、1では集合化したループ文で描かれた鋸歯文を充填する描出法ともなっている。4は円形竹管文を加えるなど、他より先行する要素が残る。また、7は、本遺跡では数少ない貝殻背圧痕文の破片である。

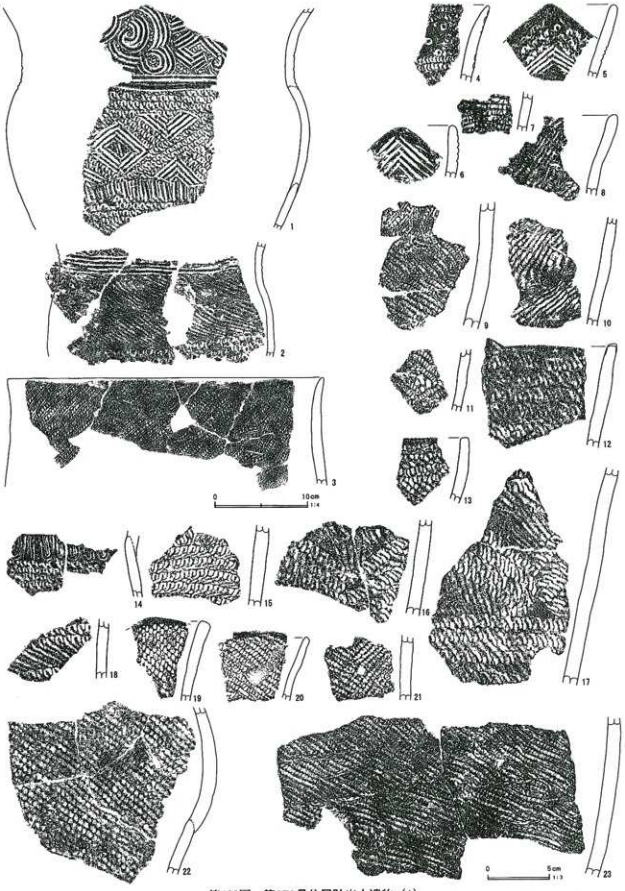
これに対し、8以下の縄文施文土器のうち、8～10が無節斜縄文、11～26に単節斜縄文が施文されている。単節の構成法は、11が第一種結束羽状縄文、12～18が多段ループによる異間隔横帯区画、19～26が横帯間の強調を認めないものである。最後者のうち、19は北東北で「ピッチリ縄文」と称された圧痕に類似する。また、22と24も節幅が大きいため、組紐の意図的な組み違えである可能性も捨てきれない。

本住居跡の縄文比率で比較的高率なのが27～32の異条斜縄文である。しかし、30～32のような圧痕の浅いものは33・34のような附加条法によって製作された原体を使用したものかも知れない。また、35は組紐縄文が残る破片、36は組紐と思われるが確定できず施文原体不明として図示したものである。

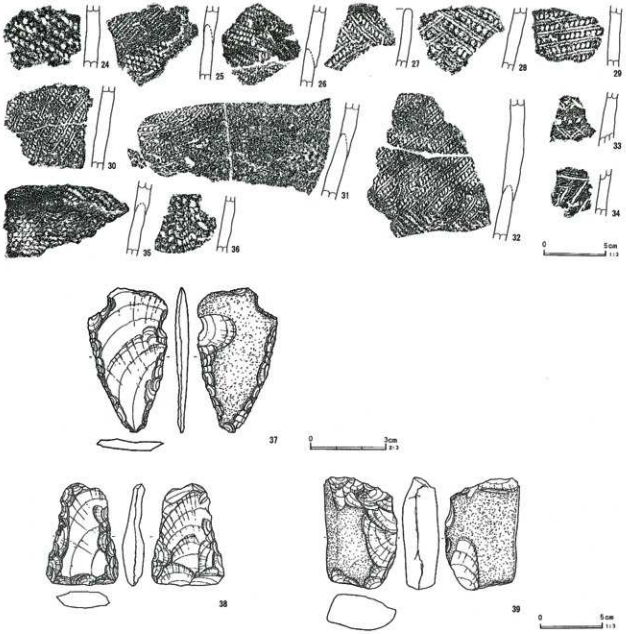
第273号住居跡（第431図）

ＣＣ－50・51グリッドで検出した。新期の竪穴住居跡と風倒木痕それぞれ1基に西方を破壊され、加えて、北壁は発見できなかった。

残された東壁と柱穴配置などから類推すると、竪



第429図　第270号住居跡出土遺物（1）



第430図　第270号住居跡出土遺物（2）

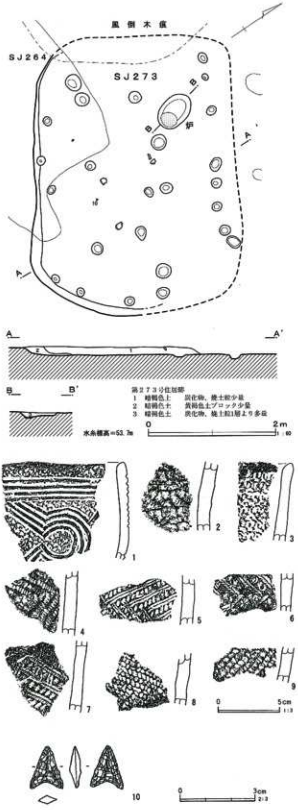
第301表　第270号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
37	石匙	5.7	3.2	0.4	9.9	黒色頁岩	
38	打製石斧	8.0	5.6	1.3	78.2	ホルンフェルス	
39	敲石？	8.3	5.8	2.8	236.6	砂岩	

穴は東西に長い長方形を基調とし、東壁がやや弧を描く形態をめざしていたと考えられる。これは、ほぼ10mの間隔を置いて並ぶ第317号住居跡と類似する軸方向と形態を示す。

前述の通り、北西方向は破壊が進んでいたため、覆土が遺存していたのは南東の一部のみであった。全体が暗褐色で占められ、下層ほどローム質のブロックが混入する。

床面は平坦で、柱穴類は壁際をめぐるようだが、判然としない。主柱穴も同様で、確定できるものはなかった。また、炉跡も発見はできたものの、中軸線からはずれ、竪穴の軸方向とも一致しない。



第431図　第273号住居跡・出土遺物

遺物の出土は少数で、石鏃1点と関山Ⅱ式を主体とする土器片が出土したにとどまる。

第273号住居跡出土土器（第431図1～9）

出土点数が少なく、9点が図示できたにすぎない。環の大きい幅狭等間隔のループ文が観察できる2を除き、関山Ⅱ期の狭い時間幅に収まる文様要素と構成が見てとれる。

1は管内痕残す竹管の集合沈線で幾何学文を描く口縁部文様帯片で、地文は8・9と同じ組紐の組み違えを用いて施文している。単節斜縄文が施文される破片は3・4があるが、前者は多段のループ帯を作出し、後者は帯間線強調を欠いている。

異条斜縄文の破片は5～7を示したが、6などは附加条法による製作かも知れない。

第298号住居跡（第432図）

EE・FF－44・45グリッドで検出した。西壁部と南の一部に新しい時期の竪穴住居跡や溝が重複するが、全体の把握に支障を来すほどではない。

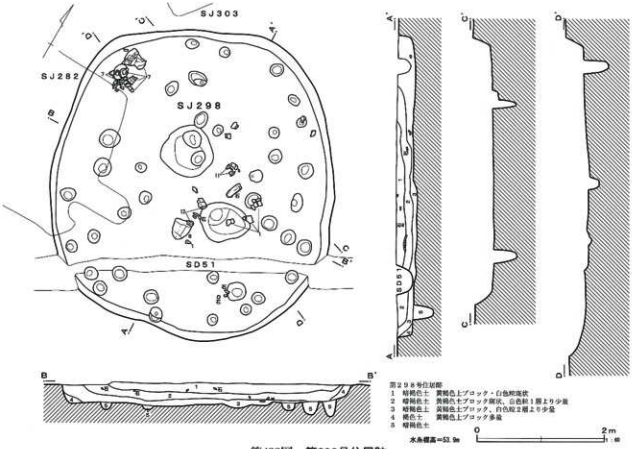
平面形態は、ややひしゃげた円形で、深く掘り込まれた竪穴内は黄褐色土ブロックが多く含まれる暗褐色土で覆われていた。他の縄文住居跡は黒褐色の覆土が主体であることを考え合わせると、周囲の竪穴掘削土がこの竪穴の窪地に持ち込まれたとも考えられる。だが、これを証明する所見を得ることはできなかった。

検出できた床面はほぼ平坦で、柱穴類は壁に沿いつつ間隔を置いてめぐる柱穴列が規則性を見てとれる。主柱穴は、C・D断面にかかる3穴のような深さを持つものもあるが、規則性のある配置は特定できなかった。

炉跡は、確定できなかったが、中央部の2箇所に浅い掘込みがあり、このいずれか、あるいは双方が

第302表　第273号住居跡出土石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考・出土位置
10	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.6	赤玉石	



第432図　第298号住居跡

炉床の形成前に放棄された可能性も考えられる。

覆土中より遺物が比較的多く出土しているのが前述の埋め戻し行為に矛盾するところであるが、とくに土器は接合後480点という出土量の割にはまとまって見つかる例が多かった。他に石斧類や石皿なども出土している。土器の文様要素や構成は、関山Ⅱ式の様相を備えているものが大半で、本住居跡の造営期も大きく遡ることはないと考える。

第298号住居跡出土土器（第433～435図）

本住居跡からの土器の出土量は第33号住居跡に次ぐ量であり、器形が推定できる個体も多く発見できた。明らかな混入品と考えられるものも少なく、関山Ⅱ期前半の良好な組成が見てとれる。

口縁部文様帯を設定する構成のうち、地文をもたない14～20は、多くの文様帯幅が狭くなり、18・19のようにコンパス文と貼付文の組合せでこれに代える例がある。

これに対し、胴部に特別の文様帯を設定する構成も含め、地文を有するもの（7・21～24）は、蕨手縄文が転化した鋸歯文と渦巻文の取り合わせを描出することが多い。竹管による施文は平行線内の地文を消し去るために肉彫状に行われているが、7・22ではこの気遣いも見られない。また、前者の遺存状態からは、口縁端部の意図的な打割も想定できる。他住居跡の埋設土器として利用されていた個体が本住居跡の投棄されたものなのだろうか。

一方、縄文のみが施文される個体のうち、最も比重が大きいのが1～4・28～54の単節斜縄文である。しかし、25～27に図示した無節斜縄文の個体も比較的多く出土しており、原体比の約4％を占める。このうち、26は隣接する条の特徴が大きく異なっており、附加条縄文に類似する圧痕が現れている。

単節斜縄文が作り出す構成は大きく5種に分けることができる。28は幅狭の施文帯間線を強調せずに羽状縄文を作出するもので、29・30は太い原体によ